

学 習 案 内

この「学習案内」は、各科目の教育目標を正しく理解した上で各自の学習計画を立てられるように、東京女子大学の教育方針を各科目区分に即して説明するものです。まず入学時に注意深く読み、その後も随時必要に応じて参照してください。また、『履修の手引』に掲載されている「履修規程」、「教育課程」等をよく読んでおくことも大切です。

リベラル・アーツ教育

東京女子大学は、創立以来「キリスト教を基盤としたリベラル・アーツ教育」を教育の根幹としています。東京女子大学では、リベラル・アーツ教育を、本来人間に備わっている洞察力、思考力、判断力、行動力を更に伸長させ、全人的成長のための基礎を築くことと捉えています。単なる知識や技能を身につけることだけではなく、その知識や技能を活かして、現代社会の多様な課題を主体的に解決できる、広い識見と創造性を有した「専門性をもつ教養人」として育成することを目標としています。その教育目標を実現するために、東京女子大学の教育課程は、次のようなことを意図して組み立てられています。

- 全学共通カリキュラムでは、専門領域を超えた学習により、幅広い視野と深い見識を養い、現代の諸問題に向き合う判断力を身につけるとともに、コミュニケーションスキル、情報リテラシ、問題解決能力等、本学での勉学を完成する上で必要とされる基礎学力・学習方法を習得する。
- 学科科目では、所属学科の学問的方法を体系的に学ぶことを通して、目先の変化に惑わされず、情報の洪水にも流されない、本質を見抜く洞察力と判断力を身につける。
- 少人数の参加型授業を通して、知識や方法論を積み上げながら論理的思考力、主体的な課題探求力や問題解決力を育成する。
- 他学科履修、副専攻などの学科横断型の学びを通して、所属学科以外の学問領域への関心を広げ、学際的視点を養う。
- 女性の自己確立とキャリア探求の基礎をつくる。
- 学士課程の集大成として卒業研究（卒業論文、Final Presentation 及び講究）に取り組むことを通して、それまでに獲得した知識やスキルを有機的に統合し、自らの課題に取り組み、問題解決につなげていく能力や姿勢を育成する。

学習計画について

学習計画を立てるにあたっては、本学の教育方針と法規（「大学設置基準」）の定めるところにより、教育課程（履修年次の指定、必修条件、科目区分ごとの履修単位数など）に従って、授業科目を系統的に履修し、卒業に必要な単位数を満たしてゆくようにしなければなりません。特に、履修年次の指定のある必修科目は、その年次に単位を修得しないと、翌年の履修計画が難しくなる場合がありますので注意を要します。4月に行われる学科・専攻ガイダンスやアドバイザーの助言を積極的に活用し、4年間に何を学ぶかを十分に考えた上で、各年次の履修計画を立て、自分の学習計画を作ってゆきま

す。各授業の概要を紹介する「シラバス」は Web 上で閲覧可能です。

単位修得について

大学が学生に単位を与えるには、大学設置基準第 21 条の公的な定めによらなければなりません。大学設置基準第 21 条では「1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもつて構成する」ことが標準とされており、2 単位の授業科目の場合、90 時間の学習が必要です。本学では、例えば、講義科目及びほとんどの演習科目において半期で 2 単位を与えていますが、その前提として、30 時間の教室内学習（1 日 2 時間×15 週）と 60 時間の教室外学習を学生に求めています。授業時間数の 2 倍にあたる教室外学習が必要となりますので、このことを心にとめて学習することが大切です。1 年間に登録できる単位数に 44 単位という上限を設けているのも、以上の趣旨による教育効果を考えているからです。また、学生が単位を修得するには、①学年始めに履修科目登録を行い、②確実に履修し、③単位認定のための試験を受け C 以上の成績評価を受けなければなりません。

全学共通カリキュラムの必修科目及び 4 年次への進級条件科目はシラバスの成績評価基準を補完するものとしてルーブリックを作成しています。ルーブリックは、各科目に求められる達成目標をどの程度達成できているかを確認するためのものです。ルーブリックを利用して、自分の学修状況を振り返り、自身の学修に足りない点を確認し、各自の学修を深めてください。

なお、ルーブリックは CampusSquare（「その他」→「ダウンロードセンター」）から閲覧することができます。

GPA（Grade Point Average：成績平均点数）制度

大学はよい教育を行う義務を学生に対して負うとともに、一定水準以上の卒業生を送り出す社会的責任を負っています。そのため厳格な成績評価が求められており、東京女子大学では、学業成績を測る基準として、GPA 制度を採用しています。S・A・B・C・F の 5 段階の成績評価で、S4.0、A3.0、B2.0、C1.0、F0 として成績平均点を計算します（X（評価不能）は 0）。GPA はアドバイザーが助言する際の参考資料とするほか、就職や海外留学の必要事項として求められた時には、成績証明書に記載します。また、GPA3.0 以上の学生は、翌年度に履修登録単位数の上限（44 単位）を超えて履修登録することが可能となります。

授業科目区分等

授業科目は、全学生が共通に学ぶ「全学共通カリキュラム」と「学科科目」とに区分されます。「全学共通カリキュラム」は、「リベラル・スタディーズ」と「アカデミック・スキル科目」の 2 つの科目群からなり、「リベラル・スタディーズ」には「総合教養科目」、「キリスト教学科目」を、「アカデミック・スキル科目」には「外国語科目」、「日本語科目」、「情報処理科目」をそれぞれ設置しています。

学生各自の関心や学習計画により、履修科目を構成するのが「自由選択科目」です。「全学共通カリキュラム」や「学科科目」を卒業に必要な最低単位数を超えて修得した場合や他学科の「学科科目」の単位を修得した場合には、「自由選択科目」の単位となります。学外学修（語学研修や他大学との単位互換等）により単位が認定された場合も「自由選択科目」として数えられます。

その他、資格取得のために「教職特設科目」、「教職課程科目」、「学芸員課程科目」があります。

他学科及び自学科内の他専攻の科目の履修

学科・専攻ガイダンスやアドバイザーの助言のもと、学生が関心ある科目を幅広く履修し、自分の専攻以外の学問領域への関心を広げ、学際的視点を養えるようにするため、他学科及び自学科内の他専攻の科目を履修できるようにしています（一部除外科目あり）。

副専攻制度

自分の所属学科・専攻以外の学問領域や専攻に隣接する学問領域についての関心を深め、学際的な視点を養うことを目標として、①キリスト教学、②女性学・ジェンダー、③比較文化の3つの領域の副専攻を設置しています。「全学共通カリキュラム」と「学科科目」から、一つのまとまりを持った学問領域として体系的・横断的にカリキュラムを編成し、履修者が主体的に学ぶ機会を提供しています。修了者には、卒業時に「副専攻修了証」を交付します。

所定の副専攻登録が必要です。履修の手引の「XI. 副専攻」を熟読してください。

教職課程・学芸員課程

教育職員免許状を取得するための教職課程、博物館の学芸員資格取得のための学芸員課程を設置しています。教職課程または学芸員課程を履修するには、所定の課程登録及び履修登録の他、手続及び説明会への参加が必要です。また、所定の課程履修費を納入する必要があります。

履修の手引の「VII. 教育職員の資格取得」及び「VIII. 学芸員の資格取得」を熟読してください。

日本語教員養成課程

日本語教員を目指す学生のために「日本語教員養成課程」を設置しています。鋭い言語感覚、豊かな国際感覚と人間性、言語に関する知識や能力を身につけ、バランスのとれた日本語支援を行う人材、さらには異文化間コミュニケーションを促進し、多文化共生を媒介する役割をも担える人材の育成を目標とし、人間科学科（言語科学専攻）の学科科目を土台に、幅広い分野からカリキュラムを編成しています。

現在、日本語教員には法に基づく免許制度はありませんが、修了者には、卒業時に「日本語教員養成課程修了証」を交付します。

所定の課程登録が必要です。履修の手引の「IX. 日本語教員養成課程」を熟読してください。

キャリア・イングリッシュ課程

リベラル・アーツ教育をとおして培われる識見と語学力をもとに、国際社会で活動できる「行動的な英語力」を身につけた人材を育成することを目標とし、選抜を経た学生を対象に「キャリア・イングリッシュ課程」を設置しています。履修者は、プレゼンテーション、ディスカッション、及び、そのための思考力、リサーチ方法、論旨構成法、英語表現法等の総合的な学習活動を行います。

修了認定は「プレゼンテーション実技試験」に基づいて行われ、修了者には、卒業時に「キャリア・イングリッシュ課程修了証」を交付します。

所定の課程登録と課程履修費の納入が必要です。履修の手引の「X. キャリア・イングリッシュ課程」を熟読してください。

「いくつもの知」履修モデル

東京女子大学にはいくつもの知があります。

履修の手引に掲載されている27の履修モデルは、本学が開講している「全学共通カリキュラム」と「学科科目」の多様な科目の中から、教授たちが「このような授業を学ぶと、まとまった『知』が修得できるのではないか」と考え、アイデアを示したものです。自分の所属する専攻の科目に捉われずに東京女子大学にあふれている、たくさんの「知」を学び、高い教養を身につけてください。

全学共通カリキュラム

《教育目標》

- ・建学の理念・キリスト教について学ぶ。
- ・「女性の生きる力」を与える。
- ・共生社会の推進への理解を深める。
- ・専門領域を超えて学ぶ姿勢を養う。
- ・学びの基礎的スキルを養う。

《構成》 幅広い視野と深い識見を養い、現代の諸問題に向き合う判断力を身につける「リベラル・スタディーズ」と本学での勉学を完成する上で必要とされる基礎学力・学習方法を修得する「アカデミック・スキル科目」の2つの科目群を設け、「リベラル・スタディーズ」には総合教養科目とキリスト教学科目、「アカデミック・スキル科目」には外国語科目、日本語科目、情報処理科目を設置し、全人的成長、教養人としての資質の向上を目指します。

《必修科目及び単位数、履修年次》

全学共通カリキュラムの必修科目及び単位数、履修年次は、以下のとおりです。

		必修 単位数	1年次	2年次	3年次	4年次	
リベラル・スタディーズ	総合教養科目	18単位	総合教養科目は、以下の①②の10科目18単位を必修とする(演習と海外教養講座を除く)。 ①「女性の生きる力」、「人間と自然科学」、「人間自身を知る」、「人間の知的生産」、「人間社会の仕組みと問題」の5領域からそれぞれ各1科目2単位を含め8科目計16単位 〔ただし、哲学、日本文学、社会学、心理学およびコミュニケーションの各専攻の学生は、各領域の必修2単位とすることができない科目があります。〕 ②「女性のウェルネス」領域の「女性のウェルネス・身体運動Ⅰ」及び「女性のウェルネス・身体運動Ⅱ」の2科目計2単位				
	キリスト教学科目	6単位	キリスト教学Ⅰ(入門Ⅰ) キリスト教学Ⅰ(入門Ⅱ)	キリスト教学ⅡA～ⅡNから1科目			
アカデミック・スキル科目	外国語科目	第一	8単位	Communication Skills A・B Discussion Skills A・B Reading IA・IB	Reading ⅡA・ⅡB		
		第二	4単位	ドイツ語初級・フランス語初級・ スペイン語初級・中国語初級・ 韓国語初級 から1か国語			
	日本語科目			(※)			
	情報処理科目	2単位		情報処理技法(リテラシ)Ⅰ			

※「日本語表現法Ⅰ」(日本語科目)【1・2年次限定】…必修科目ではありませんが、履修を勧めます。

総合教養科目

《教育目標》

全体	<ul style="list-style-type: none"> ・専門領域を超えて問題を探求する力を養う。 ・女性の自己確立の基盤となる知識・能力を身につける。
女性の生きる力	<ul style="list-style-type: none"> ・女性学の知識やジェンダー的視点から、社会・文化・歴史の諸相を理解する。 ・女性が直面する現代社会の諸問題をジェンダー的視点から分析する力を養う。 ・男女共同参画社会における女性の自立的社会参加の基盤となる知見を身につける。

人間と自然科学	<ul style="list-style-type: none"> ・人間と人間をとりまく自然界の様々な現象と生命の多様な姿を科学的に理解する。 ・科学や技術がもたらす社会的役割や影響を正しく判断できる素養を身につける。 ・現代の数学が果たす役割を理解し、論理的思考力を養う。
人間自身を知る	<ul style="list-style-type: none"> ・人間とは何かという問いかけに対して、さまざまな切り口から考える力を養う。 ・これまでの思索の歴史から現代に生きる知恵を学び、自分自身で思索する力を身につける。 ・科学や文化などの人間の営みをさまざまな視点から分析し、これからの人間や社会の在り方を探る感性を育てる。 ・人間について実証的研究を行う方法論の基礎を理解し、人間や社会について考える新しい視点を身につける。
人間の知的生産	<ul style="list-style-type: none"> ・人間の長い知の営みの中で築かれてきた歴史や文化を様々な角度から捉える力を養う。 ・世界諸地域の文化や芸術にまで視野を広げ、豊かな知性を養い感性を磨く。 ・人間の思想、意志、感情や知の営みを表現する手段について理解する。
人間社会の仕組みと問題	<ul style="list-style-type: none"> ・法律、政治、経済等の人間社会の仕組みの基本概念と基本原理を理解する。 ・社会生活の中で合理的な意思決定ができる力を養う。 ・グローバルな視点から家族・地域・仕事などといった社会の基本となる枠組みを理解し、問題点を探求する力を養う。 ・国際社会の諸問題を様々な切り口から考える力を養う。
女性のウェルネス	<ul style="list-style-type: none"> ・女性の生涯の健康を支える基礎知識・手法を習得し、自己管理能力を養う。 ・身体運動についての理解を深め、実践を通して身体能力の向上をはかる。
演習	<ul style="list-style-type: none"> ・総合教養演習・副専攻演習 学科・学年を越えた学生が議論を通して、発想の多様性に触れながら、自己の価値観を再認識するとともに広範な思考力を培う。 ・キャリア・イングリッシュ課程演習 一人ひとりの独創性や積極性を育み、英語で自己発信する力を養う。
海外教養講座	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語の運用能力を用いて、広い社会的視野と深い見識をもった国際人の育成を目指す。

《構成》 総合教養科目は、女性の自己確立を実現し、女性の生涯を支援する女子大学としての特色を生かした科目群からなる「女性の生きる力」、「女性のウェルネス」の2領域と、人間とそれを取り巻く世界を学ぶ科目群からなる「人間と自然科学」、「人間自身を知る」、「人間の知的生産」、「人間社会の仕組みと問題」の4領域とを置いています。あわせて、「演習」「海外教養講座」を設置しています。

《必修要件》 総合教養科目は、次の①②の10科目18単位を必修とします。ただし、この必修18単位には、「演習」と「海外教養講座」の単位を含めることはできません。

①「女性の生きる力」、「人間と自然科学」、「人間自身を知る」、「人間の知的生産」、「人間社会の仕組みと問題」の5領域から、それぞれ必ず各1科目2単位を含め8科目計16単位

注意 哲学専攻、日本文学専攻、社会学専攻、心理学専攻、コミュニケーション専攻の学生については、下表に示す授業科目の単位を、①の必修16単位に含めることはできますが、当該領域の必修2単位に充当することはできません。

	学科・専攻	授業科目	領域
人文学科	哲学専攻	現代人の哲学	人間自身を知る
	日本文学専攻	日本の文学	人間の知的生産
国際社会学科	社会学専攻	社会学と現代社会	人間社会の仕組みと問題
人間科学科	心理学専攻	こころの科学 こころと社会 こどものこころ	人間自身を知る
	コミュニケーション専攻	統計のしくみ	人間社会の仕組みと問題

②「女性のウェルネス」領域の「女性のウェルネス・身体運動Ⅰ」及び「女性のウェルネス・身体運動Ⅱ」の2科目計2単位

《履修に関する助言》 総合教養科目には、古典的なものから現代的なものまで、各分野の基礎的なものから複数の学問分野にまたがったものまで、多彩な科目を設置しています。また、資格取得や国家試験の準備の第一歩となる科目も含まれています。到達目標を確認し、所属学科の専門分野の関連科目だけでなく、未知の領域に積極的にアプローチし、専門分野の学習だけでは得られない知識や思考法を習得することを勧めます。4年間の学習目標を設定し、計画的に履修していきましょう。総合教養科目の履修を通して、新たな発見と豊かな知識を身につけることを期待します。

女性のウェルネス（健康・運動科学）

《必修科目》 1年次に、女性の健康を支える基礎的な知識と方法論を理論と実践から習得する「女性のウェルネス・身体運動Ⅰ」、「女性のウェルネス・身体運動Ⅱ」の2科目計2単位を履修します。

《選択科目》 より専門的、応用的、発展的な授業が選択科目として開講されています。講義科目では、身体適応、発育・発達、栄養、女性のスポーツ医学、性・生命、心身コンディショニング等を学び、実習科目では、スポーツ、フィジカルエクササイズ、身体表現等をおこなうことができます。

《履修に関する助言》 よりよく生きていくには、まず生きる力の源である「いのち・からだ・運動・健康」を理解し、女性が自身の身体の自己管理能力を養うことが必要です。積極的に履修してください。

キリスト教学科目

《教育目標》

- ・聖書を通してキリスト教を学び、建学の精神を理解する。
- ・キリスト教の歴史や思想、さらにキリスト教と芸術や社会との関わりを理解する。

《必修科目》 1年次には「キリスト教学Ⅰ（入門Ⅰ）」、「キリスト教学Ⅰ（入門Ⅱ）」の2科目計4単位を修得します。この2科目では、本学の歴史や、建学の精神であるキリスト教とその土台である聖書の内容を学びます。2年次以降の「キリスト教学Ⅱ」では、キリスト教をめぐる様々なテーマ（旧約聖書、新約聖書、女性観、歴史、日本や世界における実情、現代社会・諸宗教・倫理・思想・科学・自然・文化・芸術・文学作品等との関わり）の中から1科目2単位を選択必修として学びます。これら3科目の合計6単位が必修となっています。

《選択科目》 「キリスト教学Ⅲ」は、2年次以降に「キリスト教学Ⅱ」を履修した人がさらに問題を広げ深める内容となります。また、「キリスト教学Ⅱ」は、必修科目として履修する以外に、さらに選択科目としても履修することができます。

《履修に関する助言》 キリスト教学は、単に聖書の知識を学ぶだけではなく、人間観、生命観、世界観、倫理など現代の諸問題と深く関わっています。学問としてキリスト教を学ぶことを通して、世界や人生について真剣に考え、取り組む姿勢を学ぶようにしましょう。

外国語科目

《教育目標》

- ・国際コミュニケーションに不可欠な外国語の運用能力を養う。
- ・専門分野等大学における様々な学習に必要な語学力を習得する。
- ・異文化に対する理解を深め、複眼的な判断力を培う。

第一外国語（英語）

《教育目標》

- ・国際的に共通語として使われることの多い英語を用いたコミュニケーション能力を伸ばす。
- ・読む、聞く、話す、書くの4技能のいずれに於いても運用能力を養い、英語で受信・発信する力を伸ばす。
- ・使用される状況に応じて英語を適切に使い分ける能力を養う。
- ・専門分野の学習につながる英語力の基礎を培う。

《必修科目》 1年次と2年次に8科目計8単位が必修として課せられています。

1年次では「Communication Skills A」・「Communication Skills B」、 「Discussion Skills A」・「Discussion Skills B」および「Reading I A」・「Reading I B」の6科目計6単位、2年次では「Reading II A」・「Reading II B」の2科目計2単位が必修です。1年次、2年次ともに学習効果を高めるために、プレイメントテストの成績によるクラス編成を行っています。

Communication Skills：全クラス共通教材を用いて、使いこなせる語彙を増やし、聞き話す力を養い、筋道立てて会話するスキルを身につけます。

Discussion Skills：全クラス共通教材を用いて、英語によるグループでの議論を理解し、議論の展開に貢献する力を伸ばします。課外時間にCALL教室での自習プログラム（e-learning）が課されます。

Reading I：文やパラグラフの構成を理解するところから出発し、パラグラフの繋がり、そして文章の大意を把握する力を養います。テーマについて議論できる読解力を身につけます。

Reading II：様々なタイプの文章の読解を通して英語による論理構造を把握し、情報を集めその内容を判断する力を向上させます。

《選択科目》 1年次対象の「Basic Communicative English」（週2回の授業、前期または後期の1学期で2単位）は、プレイメントテストの結果に基づいて指示を受けた学生が履修する科目です。2年次以上では、学生の多様なニーズに応えるため、より高度な英語を学ぶための豊富な選択科目（Translation、Critical Reading and Discussion、Listening and Presentation、Academic Writing、English through Drama、Speaking Skills、Journalistic English）が設けられ、どの学生も自分の学習計画に応じて履修することができます。また、実践的な英語力を養成するために、「TOEIC講座」、「TOEFL講座」およびブリティッシュカウンシルの講師による本学独自の「英語特別プログラム」を履修することもできます。

《履修に関する助言》 1年次に必修の英語科目は、大学での学びの基礎となる科目ですので、積極的に授業に参加して語学力を伸ばすことが望まれます。2年次からは、大学生として必要な読解力を付けるとともに、自分のニーズに合わせて選択科目を十分に活用することを勧めます。

《その他》

- 本学がイギリス、アメリカ等の大学で実施している「海外語学研修」の学修の単位認定制度については、「履修の手引」の「V. 学外学修の単位認定」を参照してください。
- 「キャリア・イングリッシュ・アイランド」は、国際社会で積極的に活躍できる英語力を育成するためのプログラムです。英語の各種トレーニング、セミナー、講演会等を行っています。希望者の中から選抜された学生を対象とする「キャリア・イングリッシュ課程」については、「履修の手引」の「X. キャリア・イングリッシュ課程」を参照してください。
- 入学前の学外学修の単位認定および入学前既修得単位の認定については、「履修の手引」の「V. 学外学修の単位認定」を参照してください。

第二外国語（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・韓国語）

《教育目標》

選択必修科目（初級）	・読み、書き、聞き、話すための基礎を、文法と発音を中心として習得する。
選択科目	・初級で習得した基礎を踏まえ、大学における学習、社会における活動に役立てられる応用力を身につける。 ・それぞれの言語が用いられる地域の社会・文化への理解を深め、国際的な視野を広げる。

《必修科目》 1年次に5つの言語の中から1言語を選び、「初級」の1科目4単位を履修することが必修として課せられています。「初級」は、週2回の授業を1年間履修します。

ドイツ語：中世以来、ドイツ語文化圏は、ヨーロッパ文明を支える不可欠の一翼を担ってきました。

ドイツ語圏の歴史や文化、そしてEU内で今後ますます主導的な役割を果たす可能性が高い現在のドイツを知るためにはもちろんのこと、同じ西ゲルマン語に属する英語を客観的に見る視点を養い、類縁の言語を比較する面白さを味わう機会を得るためにも、ドイツ語の学習を勧めます。

フランス語：フランス語は約200年間、国際外交語としての地位を保ってきました。現在でもベルギー、スイス、カナダ、アフリカ諸国などの公用語または行政言語です。最初は煩雑に思われる文法規則も、いったん覚えてしまえば正確な読み取りを可能にします。また英語はフランス語の影響を強く受けて発達してきたので、英語の学習とフランス語の学習は互いに助け合うはずですが。

スペイン語：スペイン語はスペインのみならずラテンアメリカの20か国で公用語となっているほか、アメリカ合衆国でも2000万人の人々の母語となっています。使用人口は世界で約3億人いると言われ、国際連合の公用語の一つでもあります。広くヨーロッパから、ラテンアメリカの歴史、文化の理解に欠かせない言語です。

中国語：アジア、特に東アジア地域、東南アジアに関心のある人にとって、中国語の習得は歴史的にも、今後のアジアへの理解を深める一助となるでしょう。漢字を用いているとはいえ、習得の困難さは他の外国語と同じですが、その努力が理解の始まりなのです。

韓国語：韓国語は日本人にとって最も習得しやすい言葉です。文の構造は日本語と変わらず、漢字語彙はほとんどが日本語と共通のものです。歴史的にまた同時代的に密接な関係があり、最近特に韓国ドラマなどの影響もあり、学習者が急増しています。韓国語の基礎を身につけて、韓国の文化に直に触れられるようになりましょう。

《選択科目》 5つの外国語それぞれに、選択科目が設けられています。

○読解A・B、作文と文法、会話（2年次以上対象）：各学科専攻科目の履修に際して必要な外国語の基礎力を養うと同時に、異なった言語文化の多様なあり方に接することで高度の一般教養的な役割を果たすことを目指しています。同じ言語の初級4単位の修得を履修の条件としています。

○第三・第四外国語としての「初級」の履修（2年次以上対象）：必修外国語として履修した言語以外の言語を、選択科目として履修することも可能です。

《履修に関する助言》

○「初級」の言語の選び方については、各専攻の履修の助言も参照してください。

○CALL教室で行われる授業は、最初の時間にガイダンスが行われますので必ず出席してください。

○読解A・B、作文と文法、会話については、同一授業科目を重ねて履修することができます。

選択科目を初めて履修する者は、確実な学習効果をあげるために、同一授業科目を前期・後期続けて履修することを勧めます。また、総合的な語学力を培うために異なる選択科目をバランスよく履修し、理解を深めるようにしてください。

《その他》

○本学が実施している「海外語学研修」の学修の単位認定制度については、「履修の手引」の「V. 学外学修の単位認定」を参照してください。

○入学前の学外学修の単位認定および入学前既修得単位の認定については、「履修の手引」の「V. 学外学修の単位認定」を参照してください。

ギリシア語・ラテン語

ヨーロッパ古典語のギリシア語・ラテン語を選択外国語科目として学ぶことができます。初級は1年次から、中級は初級1・2の単位修得者を対象として2年次から、履修できます。

日本語科目

《教育目標》

- ・自己の考えを論理的に構築し、日本語で明確に表現できる力を身につける。
- ・日本語で表現された情報を吟味し、ポイントを的確に把握する力を養う。

《選択科目》 1・2年次限定の「日本語表現法I」では、2000字前後の論述文が作成できることを大目標に、文章のポイントを掴んだ要約、主張の論理性・妥当性の吟味、書きことばと話しことばの違いを踏まえた適切な表現等を学びます。また、2年次以上では「日本語表現法II」において、ジャンルや状況に応じた適切な表現・理解ができる日本語力を養います。

《履修に関する助言》 「日本語表現法I」は、30名程度のクラスで、グループワークも取り入れます。必修ではありませんが、多くの学生に履修を勧めます。「日本語表現法II」は、「書く」「読む」「話す」それぞれの能力に重点を置いたクラスが開講されます。伸ばしたいと思う能力を扱うクラスをシラバス等で確認し、積極的に履修してください。

情報処理科目

《教育目標》

- ・情報通信化社会に必要な、コンピュータやネットワークの基礎的なスキルや知識を習得する。
- ・情報収集や問題分析、解決、発信をするために、コンピュータやネットワークを効果的に利用する能力を養う。
- ・安全にコンピュータやネットワークを利用していくために、セキュリティやルールおよびマナーについて学ぶ。

《必修科目》 1年次の必修科目である「情報処理技法（リテラシ）I」では、確実な情報リテラシを身につけるため、WWW、電子メール、ファイルシステム、情報倫理、ワープロ・表計算・プレゼンテーションなどを学びます。

《選択科目》 多様なニーズに応える豊富な選択科目を用意しています。レポートや論文作成、発表技法、プログラミング、マルチメディア、UNIXリテラシ、Webでの情報表現、統計解析、ネットワークとセキュリティなどについてテーマごとに授業を行います。「情報処理技法（リテラシ）I」2単位の修得を履修の条件としています。（「コンピュータ・サイエンスI・II」を除く）

《履修に関する助言》 コンピュータは、ハード・ソフトとも年々改善されますから、必修単位修得後も継続して学習することが望めます。「コンピュータ・サイエンスI・II」は、コンピュータに関する最も基礎的な知識を学ぶ科目ですが、履修する場合は1年次の履修を勧めます。「情報処理技法（リテラシ）II」、「情報処理技法（UNIXリテラシ）」、「情報処理技法（Cプログラミング）I」、「情報処理技法（Javaプログラミング）I」、「情報処理技法（マルチメディアと表現）I」、および「情報処理技法（プレゼンテーション）」は、1年次後期から履修できます。「情報処理技法（リテラシ）II」は、「情報処理技法（リテラシ）I」を発展させた科目です。大学において専門分野を問わず必要な学習スキルであるコンピュータを用いて資料やデータの収集・分析、レポートや論文の作成、発表等を行う能力の強化が目標です。1年次後期での履修を強く勧めます。また、他の選択科目を履修する場合には、基盤となるスキルを扱う情報処理技法（UNIXリテラシ）の履修も強く勧めます。

人文学科

《学科の理念・目的》

人文学科は、哲学、文学、史学の分野を横断的に学ぶことを通して、人間の文化に関わる基礎的知識を広く修め、考究の姿勢、応用能力を社会のあらゆる分野に生かし、文化の創造と社会の発展に貢献できる人物の育成を目的とする。 (東京女子大学学則 第4条第2項)

多くの情報に溢れた現代社会に求められるのは、情報の波に流されず必要な知識を選択したり、応用したり、あるときは物事に対して論理的に批判したりするための豊かな教養です。人文学はそのような教養の基礎を作る知の営みです。

人文学科では、哲学、日本文学、英語文学文化、史学の4専攻を置き、各分野を横断的に学ぶことを通して、人間が長い歴史の中で積み上げてきた知的・文化的財産への理解を深め、ユニバーサルな視点を備えた現代的教養の基礎を築きます。それと同時に各分野の中心的領域を深く学ぶことを通して、個別の文化的事象への認識を深め、それぞれの視点から、人間の創ってきた文化の意味を根源から追求します。

こうした学びによって得られる人間の知的・文化的営為への深い理解の上に立って、次の時代に向けた新たな文化・社会の創造に貢献できる人物を育成します。

《カリキュラムの特色》

人文学科では、哲学、文学、史学の領域を横断的に学ぶと共に、各領域の専門性も得られるように体系的・順次的な教育課程を編成しています。

まず、1年次の必修科目で学科共通の「人文学入門」「人文学基礎演習」では、3領域の関連を広く学ぶと同時に、それらを横断する問題のとらえかた、研究方法を学びます。

つぎに、「基盤講義」および「基盤演習」を履修し、広く基礎的な知識と技法を修得して、専門を学ぶ基礎を築きます。この基盤の上に、さらにその発展学習のための「特殊講義」および「発展演習」を履修します。これらは、テーマなどを関連させ、系統的学習が可能となっています。専門に分かれ少人数のクラス編成で行う「特殊演習」では、卒業論文の作成に必要な技法の向上とともに、発表や討論を重ね、相互に批判検討することで、専門分野に対する理解を深めます。

4年次ではこれまでの学習の総決算としての卒業論文を作成します。これは、学生が自らの知的関心に沿って研究テーマを設定し、資料を収集・分析して仮説をたて、論理的・批判的考察を積み重ねることによって仮説を実証し、得られた結論を説得的に表現する、という一連の学問的営みを通じて仕上げるものです。

哲学専攻

《教育目標》

自分が生きている意義はどこにあるのか、愛とはそもそも何なのか、社会的正義の基準はどこに求めるのか、人間はなぜ死ぬのか、美や芸術は私たちに何を意味するのか…などなど、哲学専攻では人間である以上だれもが問わずにいられない疑問を正面から取り上げ、先人のさまざまな思索の跡をたどりながら、筋道立って自分の考えを深めていきます。社会に出てすぐに役立つ実用的な技芸の修得だけでなく、女性が人間として真に美しく豊かに生きるための教養（リベラル・アーツ）を身につけ、知性と感性を磨くことを目指します。

《カリキュラムの特色》

哲学専攻では、西洋哲学、倫理学、美学・芸術学、キリスト教学、東洋思想により教育課程を構成しています。地域としても西洋哲学ばかりでなく、東洋（中国、インド、日本）を含んだ形で学べるよう配慮するとともに、真に対応した狭義の哲学だけではなく、善、美、聖の価値に対応した倫理学、美学、キリスト教学の領域を設定し、これらの学問を体系的に学べるようにしています。

① 基本からじっくり学べる1学年35人の少人数の専攻です。

哲学は人間の基本的な問いを出発点としますが、ひとりよがりの思いつきや独断に終わらないためにも、また基本に立ち返って反省する習慣を身につけるためにも、すぐれた先人が残してくれた古典をじっくり学びます。少人数の特色を生かし、教員と学生が関心を共にして互いに議論し合い、切磋琢磨していきます。

② 生命・環境・科学技術など現代の直面する多様な問題を根本から考える力を養います。

哲学は、時代を超えて人々の関心の的になる問題を考えますが、これと並んで現代という時代が直面しているさまざまな問題について考えることも大事な使命です。21世紀の哲学専攻として、環境や生命、科学やテクノロジー、老いと死、戦争と平和、現代芸術などの問題について深く考える場を提供します。

③ 西洋哲学を中心に、倫理学や美学など幅広い哲学の分野を学べるカリキュラムを設置しています。

哲学専攻では、プラトンをはじめとして西洋哲学の古典を古代から現代にいたるまでまんべんなく学びます。これに加え、絵画・彫刻・音楽などの芸術や美の問題を取り扱う美学・芸術学、また、個人の道徳や社会正義の問題を扱う倫理学など、幅広い視野がもてるように、多彩なカリキュラムが用意されています。

④ キリスト教学を学ぶことができます。また日本、東洋思想にも力を入れています。

キリスト教の精神に立つ本学の哲学専攻では、「キリスト教学」に関する講義・演習を設けており、これを通してキリスト教、また、広く宗教について深く学ぶことができます。また、最近では日本、東洋思想も取り上げるように努め、西洋哲学だけに偏ることのないよう配慮しています。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。1年次では、学科の必修科目「人文学入門」により、人文学の主要な学問分野である哲学、文学、史学の基本的な考え方と方法について、最新の知見とともに広く学び、人文知の成り立ちを理解します。授業は、哲学、日本文学、英語文学、史学をそれぞれ専門とする4人の教員によるオムニバス方式で行われます。また、「人文学基礎演習」により、3つの学問分野に共通する基礎的な知識やスタディ・スキルを習得するとともに、学問に誠実に向かい合う心構えを、演習形式によって確実に身につけます。専攻科目では、哲学の基礎の理解を目指します。「哲学入門Ⅰ・Ⅱ」と「哲学基礎演習」により、哲学の初歩的な知識を得るとともに、哲学書の読解の仕方を学び、これを通して哲学的な思考法と、その表現の仕方を習得します。

2年次では、1年次の学習を受けて、引き続き「哲学概論」と「2年次演習(哲学)Ⅰ・Ⅱ」を中心に専門的な学習に向かう基礎能力を固めることを目指します。「哲学概論」は、哲学とはどのような学問かということについて、基本的な姿勢を学ぶことを目標としています。人間と文化のかかわりを中心にして、人間が言語や知識を通じて周囲のものとのように関わりながら、世界を築いていくかを考えることを通じて、問題の立て方とそれに対する自分自身の考え方を養います。「2年次演習(哲学)Ⅰ・Ⅱ」では、1年次の「哲学基礎演習」に続く哲学書講読の初級ゼミとして、3年次以降のより専門的な演習に参加するための土台をつくります。

2、3年次にかけては、《基盤講義》の「倫理学概論」、「美学概論」、「キリスト教学概論」の概論科目、「西洋哲学史AⅠ・AⅡ」、「西洋哲学史BⅠ・BⅡ」、「キリスト教史」、「東洋思想史」といった通史的科目を学ぶことによって、各自の関心に応じつつ、広く基礎的知識を学習するとともに、自ら進むべき研究のための基盤を獲得します。これらの基盤科目は、できるだけ2年次のうちに履修しておくほうがよいでしょう。基礎的な学力が、その後のすべてを決定的に左右するからです。

また、2年次から《特殊講義》を履修することができます。学生は、この特殊講義によって、各専門領域の研究に導かれるとともに、教員の研究テーマに直接触れることを通じて、最新の研究状況についての知識をも獲得することになります。

3年次以降も引き続き《特殊講義》を履修して専門分野の知見を広げて下さい。それと並び、《発展演習》の履修により、専門分野に即して資料を緻密に読解することを学ぶとともに、発表と討論を通じて問題意識を深め、また問題をいかに立て、それをいかに考察するかの方法を実地に学びます。また、このことを通じて、卒業論文で扱うべき、各自のテーマを見極めて行きます。英語、ドイツ語、フランス語、西洋古典語（ギリシア語、ラテン語）で書かれた哲学文献を扱う原書講読の演習では、難解なテキストを読み解く訓練を通じて、読解力や洞察力を深めて行きます。《特殊講義》と《発展演習》は4年次にも引き続き履修して研究の深化を図ることができます。

4年次では、卒業論文の作成を前提として「4年次特殊演習(哲学)Ⅰ・Ⅱ」を履修し、各自の問題意識に応じた問題をいかに選び、思考をどのように進め、論をいかに展開するかについて、指導教員の指導に従いながら、随時、各自の研究結果を報告し、相互に批判検討しながら作業を進めて行きます。同時に、論文の書き方、資料の調査方法とその取り扱い方など、研究を進める上での基礎的な手続きに習熟することも目指します。自らのテーマに応じた専門的研究を深めるとともに、自らの立てたテーマに沿って、資料を収集、読解し、考察を重ね、最終的に4年間の学習の成果を「卒業論文」に結実させます。

■全学共通カリキュラムとの関連について

各自の関心を広げていく姿勢を大切にしながら、学問の手法やおもしろさを実感してください。
総合教養科目：哲学はさまざまな学問と関連するので、広く積極的な履修を勧めています。キリスト教学：キリスト教は広く西洋思想の基盤ですので、哲学専攻の専門科目の基礎として、西洋思想をより深く理解するために有益です。第一外国語(英語)：文献講読・発表等の基礎能力として学習を勧めています。第二外国語：3年次以降の哲学演習(独語文献・仏語文献)の準備として有益ですので、ドイツ語またはフランス語の履修を勧めています。ギリシア語・ラテン語：西洋の文化と哲学の用語の大部分はギリシア語・ラテン語に基づいており、これらの言語に通じていることは有益です。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得については、年度初めのガイダンス時の説明と配布資料を参照してください。

人文学科および哲学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目（◎必修科目 ○選択必修科目）
1 年 次	人文学の基本的な考え方と方法について学び、人文知の成り立ちを理解する。	◎人文学入門
	人文学の3分野に共通な基礎的な知識とスタディ・スキルを習得し、学問に誠実に向かい合う心構えを身につける。	◎人文学基礎演習
	哲学の初歩的な知識を得る。	◎哲学入門Ⅰ・Ⅱ
	古典を題材に哲学書の読み方を身につけることにより、読解力を養成する。	◎哲学基礎演習
2 年 次	哲学の基礎的な知識を広く学習するとともに、自ら進むべき研究のための基盤を獲得する。	◎哲学概論 【2・3年次共通】 ○倫理学概論 ○美学概論 ○キリスト教学概論 ○西洋哲学史 AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○キリスト教史 ○東洋思想史
	【2・3・4年次共通】 各専門領域の最新の問題に触れるとともに、自らの問題意識を高める。	○特論の各科目
	基本的な文献の講読を通じて、専門的な学習に向かう基礎能力を身につける。	◎2年次演習(哲学)Ⅰ・Ⅱ
3 年 次	【3・4年次共通】 専門分野に即して、資料の扱いを学ぶとともに、発表と討論を通して問題意識を深め、また問題をいかに立て、それをいかに考察するかの方法を実地に学ぶ。また、卒業論文で扱うべき、各自のテーマについて見極める。	○哲学演習(英語文献)AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○哲学演習(独語文献)AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○哲学演習(仏語文献)AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○哲学演習(西洋古典語文献)AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○倫理学演習 AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○美学演習 AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○キリスト教学演習 AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○思想史演習 AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ
4 年 次	学生が自らの知的関心に沿って研究テーマを設定し、資料を収集・分析して仮説をたて、論理的・批判的考察を積み重ねることによって実証し、得られた結論を説得的に表現する、という一連の学問的営みを通じて、学士課程での集大成としての卒業論文を作成する。	◎4年次特殊演習(哲学)Ⅰ・Ⅱ ◎卒業論文

日本文学専攻

《教育目標》

日本文学専攻では、日本文化の中での、言語・文学の豊かな価値を追求します。日本語学・日本文学・中国文学の3部門を柱として、その有機的結合を目指しています。中国文学を重視するのは、それが日本文学の基層にあり、影響を与え続けているからです。文学作品の読解には、語学の知識が不可欠ですし、文学作品を通じた語学研究に新たな発見もあります。私たちが何気なく使っている言葉を、新たなまなざしで見直すことが、学びのスタートです。そして言語や作品の分析はもちろん、様々な文化事象との関係も学びながら、自己にとっての言葉や言語芸術の意味を深く考えていきます。

学生に期待するのは、上記3部門の基礎的な素養の上にたつて、科学的にものを考える態度を身につけることです。多くの書物に触れ、与えられた課題をよく学習することが必要なは言うまでもありませんが、それ以上に自分で問題を発見し、自分で解決していく姿勢が大事です。

《カリキュラムの特色》

① 日本語に関わることなら、何でも研究対象です。

日本語やその歴史、古典や近現代日本文学の価値、漢字・中国文学と日本文化の関係など、日本語に関わる全ての問題がテーマになりえます。同時代を総合的に見る共時的研究、時代的な推移を追う通時的研究、日本と外国の比較、登場人物や創作者の心理の探求など、様々な問題意識に応える豊富なカリキュラムです。

② 伝統的な語学・文学研究と新しい研究領域とを融合。

言葉の研究や文学研究には、長年の蓄積がある一方、異文化を背景とする文学作品との比較研究や、コンピュータによる言語情報処理、また精神病理学など隣接学問の応用など、新しい研究方法も現れました。日本文学専攻ではこうした伝統と革新とを幅広く学び、日本文化に対する新たな展望を開く力を身につけます。

③ 古代から現代に及ぶ多彩なカリキュラム。自主性を尊重し、きめ細かな指導の演習。

日本語学部門では、現代日本語をコンピュータ等を用いて分析し、また日本語史を、資料にあたって調査します。日本文学・中国文学部門では、古代から現代まで、多数の演習があり、最新の研究に基づいて議論します。創作論や日本文化論の講義もあります。演習は少人数で、学生の関心に応じて、丁寧に指導します。

④ 1年次から最新の研究を学び、3年次からは専門に分かれて研究を深める。

1年次の入門で、日本語学・古典文学・近現代文学・中国文学の基礎を学びます。2年次では、概論や特殊講義で、全体像を把握します。3年次からは学生の選択により、各分野に分かれ、演習を主体に研究方法を学びます。4年次では各自の選んだテーマによって卒業論文を作成し、4年間の総仕上げをします。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。1年次では、学科の必修科目「人文学入門」により、人文学の主要な学問分野である哲学、文学、史学の基本的な考え方と方法について、最新の知見とともに広く学び、人文知の成り立ちを理解します。授業は、哲学、日本文学、英語文学、史学をそれぞれ専門とする4人の教員によるオムニバス方式で行われます。また、「人文学基礎演習」により、3つの学問分野に共通する基礎的な知識やスタディ・スキルを習得するとともに、学問に誠実に向かい合う心構えを、演習形式によって確実に身につけます。専攻科目の「入門」では、日本語

学（日本語史・日本語文法）、日本文学（古典・近現代文学）、中国文学の3部門を必修として学び、それぞれの研究の基礎知識と方法を身につけます。また、「概論」の各科目は、12単位が必修で、日本語学、日本文学、中国文学及び日本文化学について各分野の全体像を学びます。

2年次になると3部門それぞれの《特殊講義》や《基盤演習》など選択範囲が広がります。この学年では3部門を広く学習し、自分で興味を持てる問題や研究対象を見つけ出す態度・努力が望まれます。《基盤演習》は、8単位が必修ですから卒業までに最低4科目履修して下さい。日本文学専攻では、少人数で、学生それぞれのレポートを中心に出席者が討論しながら学び、研究を深めていく演習科目を重視し充実させています。コンピュータを使って日本語を分析する「言語情報処理Ⅰ・Ⅱ」、文学研究にとって不可欠な創作者の意識・心理に対する理解を深める「創作論Ⅰ・Ⅱ」も2年次から履修できます。なお、3年次では、「3年次演習Ⅰ・Ⅱ」の中からどれか1組を選択必修として必ず履修します。この科目は卒業論文への第一歩となる科目です。2年次の夏には自分が向かう部門・分野を決めておくのが望ましく、その上で2年次後半以降の学習を通じて卒業論文の予定題目を絞り込んでいきます。

3年次では、自分の書こうとする卒論のテーマにふさわしい分野の「3年次演習Ⅰ・Ⅱ」を履修します。特別の事由が生じた場合には、4年次での変更を認めることもあります。その場合、初めに登録した「3年次演習Ⅰ・Ⅱ」の単位が取れていれば、新たに「3年次演習Ⅰ・Ⅱ」を取り直す必要はありませんが、さまざまな遅れが生じますので、「3年次演習Ⅰ・Ⅱ」の選択は慎重にしましょう。また3年次では、論文題目の決定を見越して計画的に履修しましょう。

4年次には、「4年次特殊演習（日本文学）Ⅰ・Ⅱ」が必修になります。ここで、指導教員から具体的な卒業論文についての指導を受け、討議を経て卒論制作を行います。ここでも、単に指導を受けるのを待つだけの姿勢ではなく、自ら考え、自ら構想を立てて、積極的に発言するよう、努力が必要です。この授業を通じて、必要な助言と指導が得られますが、あくまで学生自身が主体的に論文制作にあたらねばなりません。

卒業論文は学部での勉学の総決算と言うべきもので、感想文・評論文や普段のレポートの長いものでは決してありません。それにふさわしく、周到に準備を進め、最低でも正味一年は掛ける心構えが必要です。論理と実証とが論文の両輪であることを忘れず、学部での勉学の成果を結集してほしいと思います。その研究過程を通して、創り出す喜びも伴うはずで、その経験は、将来どんな分野に進んでも、必ず生きることでしょう。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：学科科目の履修には、日本語・日本文学・日本文化に対する幅広い知見が必要です。「日本の文学」*、「日本文化史」、「ことばの世界」、「日本の古典芸能」などは、その基礎力を養成することに寄与します。また思想・歴史なども、考察の基盤を作るものとして重要です。第一外国語（英語）：日本語への関心は、他の言語との対照関係によって生まれることが多く、日本語を対象化して見る目を養うために、他言語の習得は不可欠です。第二外国語：特に中国文学分野に進む学生に対して、中国語の履修を勧めています。情報処理科目：日本語・日本文学・中国文学いずれの分野でも、コンピュータによる情報処理は今や不可欠であり、積極的に履修するよう勧めています。

（*総合教養科目の必修要件参照）

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

人文学科および日本文学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目（◎必修科目 ○選択必修科目）
1年次	人文学の基本的な考え方と方法について学び、人文知の成り立ちを理解する。	◎人文学入門
	人文学の3分野に共通な基礎的な知識とスタディ・スキルを習得し、学問に誠実に向かい合う心構えを身につける。	◎人文学基礎演習
	日本語学、日本文学、中国文学の基礎的知識と方法を身につける。	◎日本語史入門 ◎日本語文法入門 ◎日本古典文学入門 ◎日本近現代文学入門 ◎漢文学入門
	【1・2・3年次共通】 日本語学、日本文学、中国文学の全体像を把握する。	○日本語学概論Ⅰ・Ⅱ ○日本語史概論Ⅰ・Ⅱ ○日本文学概論(古典)AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ ○日本文学概論(近現代)Ⅰ・Ⅱ ○中国文学概論Ⅰ・Ⅱ ○中国語学概論Ⅰ・Ⅱ ○日本文化学概論Ⅰ・Ⅱ
2年次	【2・3・4年次共通】 日本語学、日本文学、中国文学の各分野の理解を深める。	○特殊講義の各科目 (日本語学、日本文学、中国文学、日本文化学の各科目 及び 言語情報処理、創作論)
	【2・3年次共通】 日本語学、日本文学、中国文学の研究方法を身につける。	○基盤演習の各科目
3年次	自分の専門のテーマに関連した分野に対する深い理解と卒業論文作成に必要な能力を養う。	○3年次演習Ⅰ・Ⅱの各科目
4年次	学生が自らの知的関心に沿って研究テーマを設定し、資料を収集・分析して仮説をたて、論理的・批判的考察を積み重ねることによって実証し、得られた結論を説得的に表現する、という一連の学問的営みを通じて、学士課程での集大成として論文を作成する。	◎4年次特殊演習(日本文学)Ⅰ・Ⅱ ◎卒業論文

英語文学文化専攻

《教育目標》

専門知識とさまざまな場で役立つ英語力をバランスよく身につけ、知的教養を培い、国際的視野に立って実社会で活躍できる人材の育成を目標としています。英米を中心に英語圏の文学と文化を考え、英語の多様性と変化の諸相、言語と社会の関わりについて理解を深めます。英語で書かれた多様な文学を文化・歴史的背景と関連させて学び、また、そうした文化を生み出す英語という言語を探究します。

《カリキュラムの特色》

国際語である英語を理解し、英語で自分の考えを明確に表現できる力がつくよう配慮されたカリキュラムです。授業は、基礎的学力養成と専門的学習とに分かれます。基礎英語力については、1年次から3年次まで speaking、listening、writing、reading の訓練を行います。専門には、英語文学、英語学、Presentation(カルチュラル・スタディーズ)があります。

〈英語文学〉では、英米を中心とした英語圏の文化・文学について、歴史やある主題に沿って学びます。Shakespeare の時代から現代に至る詩、演劇、小説、批評に関する講義や演習などのクラスで、実際に作品を読み、作家や時代・文化的背景について学びます。

〈英語学〉では、統語論、意味論、語用論、英語史、社会言語学、音韻論、さらに文体論など、幅広く言語としての英語について学習します。

〈Presentation〉では、カルチュラル・スタディーズの理論を学び、文化を表象するテキストを批判的に読み、鑑賞し、さらに分析します。その上で Presentation の技法を学び、英語で口頭発表する力を養うことを目指しています。

具体的には、次のような特長があります。

- ① 英語力を高める緻密な教育プログラム。英語を母語とする教員による実践的な授業
英語を理解し、英語で自分の考えを表現できる力をつけます。例えば、1年次から3年次まで英語を母語とする教員によるクラスを設け、年次進行に従い積み上げていきます。基礎から鍛え、高度な読解力や表現力を育成していきます。
- ② 充実した少人数編成の授業による発表能力を重んじたきめ細かい指導
演習形式の授業をはじめ、英語音声学、英文法（知識と実践）などの基礎科目でも、少人数編成のクラスで、きめ細かい指導を行っています。特に演習形式のクラスは、一人ひとりが考える力を養います。
- ③ 異文化としての英語圏の文化の理解を深める多様な講義・演習
英語圏の文化の多様性を知るために、英語による詩、演劇、小説などの文学、映画などの大衆文化、そして文化の土台となる英語を学びます。
- ④ 英語で書く卒業論文の達成感、即戦力を目指すFinal Presentation
各分野での研究成果を発表する能力の育成も重視しています。英語による卒業論文作成、あるいは口頭発表が目標です。特に、専門の外国人教員が担当するPresentationのコースでは、より高度な英語表現能力の育成を目指します。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。

1年次では、学科の必修科目「人文学入門」により、人文学の主要な学問分野である哲学、文学、史学の基本的な考え方と方法について、最新の知見とともに広く学び、人文知の成り立ちを理解します。授業は、哲学、日本文学、英語文学、史学をそれぞれ専門とする4人の教員によるオムニバ

ス方式で行われます。また、「人文学基礎演習」により、3つの学問分野に共通する基礎的な知識やスタディ・スキルを習得するとともに、学問に誠実に向かい合う心構えを、演習形式によって確実に身につけます。専攻科目では、まず、1年次でいずれの分野を学習するにせよ、共通に土台として身につけるべき基礎英語力の養成と基礎的専門知識の習得を目指します。「Freshman English Seminar I・II」は、全体的な英文執筆能力のレベルを上げることを目標とします。1年次から履修可能な選択科目として「英語学基礎演習 I・II」及び「英語文学基礎演習 I・II」があり、英語学と英語文学に関する基礎的な知識を演習形式の授業で学びます。これらの科目を履修することで、幅広い知識と教養を身につけるための基礎的な英語力をしっかりと培い、専門分野を学ぶ基礎として英語学、英語圏文学・文化の読み解き方などを学びます。

2年次では、英語力をさらに総合的に高めるとともに、引き続き基礎的専門知識の習得を目指します。《基盤演習》の「英語音声学 I」では、英語独特の音声的特徴の基本知識を学ぶとともに、英語の発音の仕方を身につけます。「Sophomore Reading and Writing I・II」では、1年次の「Freshman English Seminar I・II」で得たスキルをふまえ、テキストを理解し分析する能力と、理解した内容について短い学術的なエッセイを書く能力の向上を図ります。「英文法(知識と実践) I・II」では、英語の文構造、品詞・用法などについての基礎知識を習得し、実践の中で活用することで英語語法への理解を深めます。《基盤講義》の「英語学基礎論」の各授業科目では、英語という言語について、社会との関連や言語の構造的な特質について理解することを目指します。「英語文学・文化基礎論」の各授業科目では、英語による文学や文化を分析するための読解力の向上を図り、英語という言葉に対する感受性を養うことを目指します。また、2年次から《特殊講義》や《発展演習》の一部を履修することが出来ます。これらの基礎的知識を基にして、各自が専門に学びたい分野を選びます。なお、4年次で Final Presentation を選択したいと考える学生は、2年次で「Presentation 基礎演習 I・II」を履修することが望まれます。

3年次では、「卒業論文」または「Final Presentation」に備え、英語文学、英語学、Presentation のいずれかの分野の特殊演習に所属し（「3年次特殊演習(英語文学文化) I・II」）、それぞれの分野の基本的な研究方法を学びます。同時に、「Junior Composition I・II」で、2年次の「Sophomore Reading and Writing I・II」を発展させた学術的エッセイ・ライティングを実践し、高度な論文作成のための英語表現、論文構成を学びます。《特殊講義》や《発展演習》では、引き続き幅広い知識を習得するとともに、特定のテーマについての知識と考察を深める専門的学習を行います。

4年次では、各自の研究対象を見定め、それぞれの分野の「4年次特殊演習(英語文学文化) I・II」に所属し、4年間の学習の集大成として、英語による「卒業論文」作成または「Final Presentation」に臨むこととなります。「卒業論文」または「Final Presentation」では、1年次から培った英語の読解力および表現力を用いて、論文作成または口頭発表を行います。これには多大な労力、集中力および時間が必要です。力を尽くして、主体的、積極的な姿勢で取り組むことが望まれます。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：学際的視点を学ぶ「比較文化」、女性学・ジェンダーの視点を学ぶ「共生社会とジェンダー」など、広く積極的な履修を勧めています。キリスト教学科目：英語文学・文化の精神風土の理解を深めるために、履修を勧めています。第一外国語(英語)：専門分野の研究に必須となるので、種々の選択科目の履修を推奨しています。第二外国語：特に言語を指示しませんので、自分の関心に従って履修してください。ギリシア語・ラテン語：専門分野の研究には西洋古典の知識も必要となるため、学習を勧めています。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

人文学科および英語文学文化専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目 (◎必修科目 ○選択必修科目 △選択科目)
1 年 次	人文学の基本的な考え方と方法について学び、人文知の成り立ちを理解する。	◎人文学入門
	人文学の3分野に共通な基礎的な知識とスタディ・スキルを習得し、学間に誠実に向かい合う心構えを身につける。	◎人文学基礎演習
	英文の構成力を養う。	◎Freshman English Seminar I・II
	英語学と英語文学に関する基礎的な知識を演習形式の授業で学ぶ。	△英語学基礎演習 I・II △英語文学基礎演習 I・II
2 年 次	文学作品等を理解し分析する能力を高め、論理的にまとめ英語で表現する力を養う。	◎Sophomore Reading and Writing I・II
	英語の文構造についての基本概念など、基礎知識を習得する。	◎英文法(知識と実践) I・II
	英語独特の音声的特徴の基本的知識を学び、英語の発音方法を習得する。	◎英語音声学 I
	英語学、文学・文化についての基礎的専門知識を学ぶ。	○英語学基礎論(ことばと社会) ○英語学基礎論(ことばのしくみ) ○英語文学・文化基礎論 A I・A II・B I・B II
3 年 次	論理的な英文を書く能力を高める。	◎Junior Composition I・II
	自分で資料収集の仕方や論理の組み立て方など、論文作成の技法を学ぶ。	◎3年次特殊演習(英語文学文化) I・II
	【3・4年次共通】 各研究領域について理解を深め、また方法論について学ぶ。	○特殊講義の各科目 ○発展演習の各科目
4 年 次	学生が自らの知的関心に沿って研究テーマを設定し、資料を収集・分析して仮説をたて、論理的・批判的考察を積み重ねることによって実証し、得られた結論を説得的に表現する、という一連の学問的営みを通じて、学士課程での集大成として論文を作成し、また、Presentationを行う。	◎4年次特殊演習(英語文学文化) I・II ◎「卒業論文」又は「Final Presentation」

史学専攻

《教育目標》

過去に向かって何かを問いかけ、その問いをつきつめていくのが歴史学です。私たちは過去の世界を振り返ることによって、何が失われてしまったのか、私たちに何が欠落しているのかを知ることができます。それは新しい未来を展望し、よりよい社会を作り出すためにも必要なことです。大切なのは、みなさん自身が歴史を学ぶなかで、人間を見つめ、人間をめぐるさまざまな問題を総合的に理解する能力を身につけること。このような能力は、自己を確立していく上でも国際社会の中で生きていくためにも必要とされるものです。こうした問題意識の下、史学専攻では、日本と世界の歴史を学ぶことを通して、過去に対して生きた想像力を働かせ、先人たちが残してきた成果を尊重し、そのうえで自ら調べ自ら考えることのできる人間を育てること、そして、広く深い学識とバランス感覚をあわせそなえ、明日の時代を主体的に生きることができるよう個性を養うことを教育目標としています。

《カリキュラムの特色》

歴史学の対象は古今東西にわたる広い領域に及んでいます。そこで史学専攻では、2年次までではできるだけ広い分野にわたる知識の修得をめざし、2年次後期から日本史・東洋史・西洋史の各分野に分かれて専門知識を深めるような教育課程が用意されています。また、演習を年次別に履修し、講義を基盤講義から特殊講義へと段階的に履修することによって、歴史学全般の基礎知識から各分野にまたがる専門知識に至るまで習得することが可能となっています。

① 少人数の演習を通して、自ら調べ、自ら考える力を養成する

大学では、自らの問題意識にもとづく主体的な学習が基本となります。そのため授業では、参加者の疑問や主張を明らかにし、互いに理解を深めあうことができるように、少人数での討論や発表を大切にしています。

② 史料や原典にもとづいて事実を確かめ、構成力を育む

歴史の真実、史実とは何か。これを解明することは大変むずかしいことです。そのため、専門の研究書を読み、当時の文書や考古学的史料などを丹念に調べることが求められます。こうした学問的訓練を積んで、限られた史料のなかから歴史像を描いていく構成力を育てていきます。

③ 国際交流に必要な、日本や諸外国の歴史と文化を理解する

異文化交流、国際交流のためには、その国や地域の歴史、文化を理解すると同時に、自らの歴史、文化をよく知ることが大切です。史学専攻では、日本史・東洋史・西洋史に分かれ、教員とともに、それぞれ関心のある時代や地域の歴史や文化について互いに学びあうことができます。

④ 「自ら調べ、自ら考え、自ら表現する」大学での学習のまとめとして卒業論文を重視する

卒業論文を書くには、まず自分で主題を考え、それに関する研究や史料を探して読みこなします。その上で、自分で論文を構成し、文章を書くこととなります。大学での学習成果の集大成として、史学専攻では、卒業論文そのものだけでなく、その作成過程も大切にしています。

《履修法の助言》

■ 学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。

1年次では、学科の必修科目「人文学入門」により、人文学の主要な学問分野である哲学、文学、史学の基本的な考え方と方法について、最新の知見とともに広く学び、人文知の成り立ちを理解し

ます。授業は、哲学、日本文学、英語文学、史学をそれぞれ専門とする4人の教員によるオムニバス方式で行われます。また、「人文学基礎演習」により、3つの学問分野に共通する基礎的な知識やスタディ・スキルを習得するとともに、学問に誠実に向かい合う心構えを、演習形式によって確実に身につけます。専攻科目の「歴史学基礎演習」では、歴史のおもしろさを実感し、歴史学に対する知的関心を高めつつ、歴史を研究していくうえで求められる諸能力（論理的・批判的思考能力、歴史的テキストの読解力、問題発見能力等）を身につけていきます。また、質疑応答や討論を重ねていくことによって、コミュニケーション能力も育成します。1年次から2年次にかけて履修する「概説」では、日本史・東洋史・西洋史の3分野すべてについて、基礎知識を体系的に修得します。

2年次前期では、「史学概論」で歴史学がどのような学問でありどのように発展してきたかを学びます。同時に、「歴史学演習」において、歴史書または歴史論文を精読して内容を正確に把握し、論点をまとめて報告する力を身につけ、歴史の知識を充実させ、歴史学に対する視野を広げていきます。それを承けて、後期の日本史・東洋史・西洋史ごとの「基礎演習」では、各時代・各地域において重要とされるトピックを題材にして、関連する最新の研究文献や重要史料とのクロスレファレンス作業を繰り返し行い、専門的に学んでいくうえで必要となる基礎知識と技法を習得します。また、2年次から、自分の問題関心にそって、「特殊講義」を履修することができます。「特殊講義」では、歴史学への理解を順次的・体系的に深めることができるよう、主として、前期に通史的な科目が、後期に特定の時代や地域、テーマを論じる「特論」「美術史」「考古学」が配置されています。これらの講義と演習を通して、先行研究を踏まえた適切な研究テーマを主体的に選択できる力を身につけながら、自らが進む専門分野を判断していきます。

3年次では、各分野に分かれて本格的な専門知識の修得をめざします。「特殊講義」とならんで、各分野の《発展演習》を1年間通して履修し、自分の専門分野に関連した知識をより深めていきます。さらに後期には自分の関心を卒業論文へとつなげていくための「3年次特殊演習（史学）」を履修します。この演習では、卒業論文とは何かという理念的な側面と、文献の検索や読解の方法、問題発見の方法という技術的な側面の両方について学び、卒業論文作成のための基礎的な準備を進めながら、卒業論文のテーマを決めていきます。

4年次前期には、「4年次演習（史学）」を履修して、これまで学んだ専門知識にさらに磨きをかけます。この演習では、研究文献や史料を取り上げてそれらの内容を整理して重要な論点を抽出する訓練を行い、それぞれの研究テーマを中心に研究発表を行います。文献読解や研究発表のための準備作業、授業時における討論を通じて、史資料の探し方と使い方、それらを研究史上に位置づける方法を学び、卒業論文作成に不可欠なノウハウを身につけていきます。後期の「4年次特殊演習（史学）」では、卒業論文作成のための専門的・具体的指導をうけて、論文の完成を目指します。中間報告会を行い、問題設定、篇別構成、分析手法、行論等に関する問題点を批判的に検討しあい、この中間報告会でのレビューを踏まえ、さらに発表および討論を重ねることによって、卒業論文の内容の深化を図ります。卒業論文は4年間の学生生活の総仕上げであり、その準備と執筆の労苦を通して、歴史学への主体的な参加の道が開けるのだと私たちは考えています。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：歴史学をより深く理解するために「ヨーロッパの歴史と文化」「アメリカの歴史と文化」「ラテンアメリカの歴史と文化」「アジアの歴史と文化」「世界史の見方」「世界の地域と民族」「現代史の諸相」「国際社会と人権」「日本宗教史」、ジェンダー史の視点を理解するために「女性とジェンダーの歴史」、「日本史の隣接分野」の基礎として「民俗学」の履修を勧めています。

キリスト教学科目：西洋の精神風土をより深く理解するために履修を勧めています。

第一外国語（英語）：日本近現代史、東洋史、西洋史関連の史料・文献読解のために積極的な履修を勧めています。 第二外国語：将来の専門分野を十分に考慮して外国語を選んでください。

ギリシア語・ラテン語：西洋古代史をより深く理解するために履修を勧めています。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

人文学科および史学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目（◎必修科目 ○選択必修科目）
1 年 次	人文学の基本的な考え方と方法について学び、人文知の成り立ちを理解する。	◎人文学入門
	人文学の3分野に共通な基礎的な知識とスタディ・スキルを習得し、学問に誠実に向かい合う心構えを身につける。	◎人文学基礎演習
	歴史学全般の基礎知識を広く学ぶとともに歴史学研究に必要な諸能力を身につける。	◎歴史学基礎演習
	【1・2年次共通】日本史・東洋史・西洋史の3分野すべてについて、各分野の基礎知識を学ぶ。	◎日本史概説Ⅰ・Ⅱ ◎東洋史概説Ⅰ・Ⅱ ◎西洋史概説Ⅰ・Ⅱ
2 年 次	歴史学の成り立ちと方法論を学ぶ。	◎史学概論
	歴史学の知識・視野をさらに広げていく。	◎歴史学演習
	各専門分野の基礎知識を習得し、適切な研究テーマを主体的に選択できるようにする。	○日本史基礎演習 ○東洋史基礎演習 ○西洋史基礎演習 の各科目
	【2・3・4年次共通】特定の分野、地域、時代についての歴史学の理解を深める。	○特殊講義の各科目
3 年 次	【3・4年次共通】各分野に分かれ、自分の専門テーマに関連した問題関心・知識をより深めていく。	○日本史演習 ○東洋史演習 ○西洋史演習 の各科目
	歴史学への深い理解と卒業論文作成に必要な能力を養う。	◎3年次特殊演習(史学)
4 年 次	卒業論文作成に不可欠な知識や技法を身につける。	◎4年次演習(史学)
	自ら研究テーマを設定し、資料を収集・分析して仮説をたて、論理的・批判的考察を積み重ねることによって実証し、得られた結論を説得的に表現する、という一連の学問的営みを通じて、これまでの学習成果の集大成として論文を作成する。	◎4年次特殊演習(史学) ◎卒業論文

国際社会学科

《学科の理念・目的》

国際社会学科は、国際関係、経済学、社会学の分野を横断的に学ぶことを通して、現代社会を世界的な視野でとらえ、豊かな教養と専門性を備えた地球市民として、地域社会や国際社会で活躍できる人物の育成を目的とする。
(東京女子大学学則 第4条第3項)

国際化が進展し、政治・経済だけでなくエネルギーや食糧の供給など日常生活にかかわるあらゆる事柄は、国際関係のネットワークの上に成り立っています。社会の諸問題の解決において、グローバルな視野は不可欠になっています。国際社会学科では、現代社会を日本国内だけでなく、アジア、欧米、そして世界の視点でとらえて学びます。国際関係、経済学、社会学の3専攻は、学問分野として相互に関連しており、専攻の枠をこえて横断的に履修し、社会の多面的な姿をとらえることを通して広い視野と柔軟な問題解決力を養います。さらに、各専攻の高度な専門性を身につけ、身近な地域社会においても国際社会においても、実践力のある地球市民として活躍することを目指しています。

社会科学を中心とした方法論（国際関係論、政治学、経済学、社会学、歴史学、文化人類学、社会言語学）を複合的に用いて、人間社会のあり方を探究しつつ、国際社会の動向に広く目を向けること、また歴史的な背景に視点を置くこと、さらにグローバルかつミクロの視点から迫ることで、広い視野と柔軟な思考力をも養っていきます。

国際社会学科で得た知見を糧に、性別に捉われず、生涯にわたりキャリアを探求し、地域社会や国際社会で活躍できる個性豊かな人材を育成します。

《カリキュラムの特色》

国際社会学科では、国際関係、経済学、社会学等の諸分野を横断的に学びます。まず、各社会科学的学問分野の基礎を理解させるため、「入門」を置くとともに、各専攻の学問領域の基礎的科目として「基礎講義」を配置しています。これらの科目は主に1、2年次で履修します。さらに、グローバル化の下における国際社会、日本社会について理解を深め、本格的な専門知識の習得を図るため「応用講義」を置いています。両講義部門とも、専攻間の壁をできるだけ低くし、専攻を超えて社会科学及びその隣接専門分野を多様に学ぶことが可能です。また、少人数でのクラス編成で学生自らが主体的に調査をし、発表し議論しあいながら、異なる複数の方法論が必要なことを理解するための「基盤演習」、自分の専門とする学問分野の研究を深め、より高度な知識を蓄積していくための「発展演習」も置いています。以上のように「入門」、「基礎講義」、「基盤演習」から「応用講義」、「発展演習」へと科目群を系統的に配置し、それらの科目を履修することによって、社会科学的手法を身につけ、卒業論文の執筆に備えます。卒業論文は、全員が執筆します。テーマを選び、文献を読み、場合によっては実地調査をしながら仕上げていきます。卒業論文は、大学での勉強の総決算であり、4年間にどれだけ視野を広げ知識を培ってきたか、その全てが問われます。いざという時になってあわてないよう日頃から積極的かつ主体的な態度で学習に取り組んでいくことを期待しています。

国際関係専攻

《教育目標》

国際関係専攻は、国際関係学、歴史学、比較文化、文化人類学、政治学、女性学、社会言語学などの研究方法を使い、日本、南北アメリカ、東アジア、東南アジア、南アジア、アフリカなどの国家や地域、およびそれら国家や地域にまたがって、その政治、経済、外交、歴史、社会、文化、思想について総合的に理解を深め、国際社会に貢献できる人材を養成することを目的としています。現代世界をとらえる複数の視座と多様な知識を背景にして、自分で考え、判断し、説得力ある議論を展開する力を身につけていきましょう。

《カリキュラムの特色》

国際関係専攻では、現代の国際社会を構造的に理解する「国際関係学」と、諸地域を多面的に扱う「地域研究・比較文化」および国境横断的、通文化的に複数の地域を捉える「文化人類学」の諸科目を置いています。各国・各地域における動向を理解するためにも、異文化の理解が不可欠です。地球規模で一つになろうとしているグローバリゼーションと、それぞれの地域の特性を活かすローカリゼーションの、相反する二つの動きを同時に学んでいくことが可能なカリキュラムとなっています。

① 国際関係学

国際社会における現代的諸問題を素材にしなが、何が問題か、なぜそうなるのかということをも理論や歴史を通して考えていきます。

② 地域研究・比較文化

日本・アメリカ・アジア諸地域の歴史・政治・文化・社会など、諸地域の特性ならびに地域間の関係を総合的に理解していきます。

③ 文化人類学

世界各地の人類を社会的・文化的次元で総合的にとらえ、実際に人々が生きている時と場所において理解しようとし、特に発展途上国については膨大な研究の蓄積があります。

1年次から4年次に演習を置いています。学年の進行とともに専門的方法論や高度な知識を積み上げ、専門にしようとする地域や分野の研究の充実をはかります。3、4年次では、演習を担当する教員による専門研究の講義が開講されます。演習関連領域の講義を必ず履修することによって卒業研究を深める力を養成していきます。

《履修法の助言》

■ 学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。

1年次では、学科入門科目としての「国際社会論」により国際社会研究の基礎的視座とは何かを学びます。この授業を前提に「国際社会基礎演習」で、グローバル化する現代社会の諸問題、およびそれを考察するための基礎理論を学びます。専攻科目では、《入門》の「文化人類学入門Ⅰ・Ⅱ」「国際関係論Ⅰ・Ⅱ」において、専攻で学ぶ基礎力育成のための通文化的視点や歴史感覚を養い、「基礎演習（国際関係）」で、スタディ・スキル（レポート・小論文の書き方、口頭発表の仕方、図書館やインターネットを使った文献の探し方など）やチューデント・スキル（大学生に求められる一般常識や態度など）を培っていきます。これらを履修することで専攻を構成する複数の領域の初歩的な知識を身につけていきます。1年次から履修することができる《基礎講義》では、比較文化、国際関係史、研究対象となる諸地域（日本・中国・朝鮮・東南アジア・アメリカ）の基礎知識を習得し、また、各概論では、日本史・東洋史・西洋史・法学・政治学の基礎を学ぶことができ

ます。

2年次では、地域文化の多様性にふれるより高度な専門的知識を学び始め、3年次からどの専門分野に進むかを自ら選択できるよう各自の問題意識を高めていきます。「2年次演習（国際関係）Ⅰ・Ⅱ」では、専門的方法論やより高度の知識を学び、抽象的理論的議論の理解を深めることで、3・4年次の専門演習にスムーズにつながることをめざします。講義では、1年次で学んだ歴史、地域研究、文化人類学等についてもより専門的なテーマで幅広く学びます。2年次から履修を開始できる《応用講義》には、多岐にわたる科目が用意されています。

国際関係専攻の基本的な考えは、1・2年次は「広く」、3・4年次は「深く」学び、専門研究に集中するのは3年次からでも十分だということです。あまり早い段階から関心を狭い問題に絞らず、内なる「学際性」を高めるよう努力してください。専攻の学習においては、多くの地域、多くの分野に触れることを心がけてください。たとえば、中国研究を志望していても、アメリカや日本関係の科目を履修する、あるいは、国際関係に興味がある学生でも、文化人類学や比較文化系の講義も履修することが望まれます。

目安としては、例えば2年次から履修を開始できる《応用講義》の近現代史（「日本近現代史A」～「アメリカ史Ⅱ」）、地域研究（「現代中国論」～「イスラム文化特論」）、人類学（「社会人類学特論A」～「人権・人道の人類学」）、国際関係学（「国際関係（日米）」～「現代アメリカ政治論」）の各分野から、それぞれ2科目以上を履修するのがよいでしょう。

また視野を広げるといふ点では、総合教養科目、経済学専攻や社会学専攻の専攻科目、他学科の学科科目も大いに参考になるでしょう。

3年次では、各分野の専門研究の講義を「3年次演習（国際関係）Ⅰ・Ⅱ」とあわせて履修することで、より高度な知識を身につけ、卒業論文に向けて問題意識をさらに高めることを目標とします。《応用講義》では、研究テーマに沿って、自分の専門地域、方法論を学び、卒業論文に向けて専門性を深めます。履修上の注意として、3・4年次の演習とペアとなる、演習担当教員による専門研究の講義（3・4年次対象の《応用講義》）が開講されているので、その科目は3・4年次のいずれかで必ず履修してください。演習関連領域の講義を必ず履修することで、卒業研究を深める力を養成していきます。3・4年次の演習では、2年連続で専門にしようとする地域や分野の研究を深めていきます。したがって、「3年次演習（国際関係）Ⅰ・Ⅱ」は、卒業論文で取り組む課題の方向性について十分考えた上で選択することになります。

4年次では、「4年次演習（国際関係）Ⅰ・Ⅱ」で綿密な指導を受けながら、3年次で深めた専門知識や方法論を自らの問題意識と結びつけながら、卒業論文を仕上げます。卒業論文は卒業年次に全員が提出します。4年次の5月末には題目を提出しなければならないため、遅くとも4年次になる前までにはどのような主題を扱うのか、考えをある程度まとめておき、題目を提出するまでに、演習担当の教員と十分に相談しておく必要があります。3年次で履修する多くの専門研究の講義や「3年次演習（国際関係）Ⅰ・Ⅱ」の内容は、卒論作成に大いに役立つものですが、それらが直接自分の卒論題目と結びつくわけではありません。4年次においては、各人のテーマにあわせ、必要な科目を新たに履修する必要もあるでしょう。卒業論文のテーマは教師から与えられるものではなく、自ら色々な可能性の中から問題意識を絞り込んで決めるものです。『地域文化研究』（4月配布）に載せてあるこれまでの卒業論文の題目を参考にするのもよいでしょう。卒業論文は大学での勉強の総決算であり、4年間にどれだけ視野を広げ知識を培ってきたか、そのすべてが問われるといっただけよいでしょう。いざというときになって慌てないように日ごろから積極的かつ主体的な態度で学習に取り組むことを期待します。また、卒業論文は提出期限を厳密に守り、かつ定められた様式にしたがって提出しなければなりません。本専攻では年度初めに4年生に対して『卒業論文の手引』を配布しています。そこに書かれた注意事項をよく読み、常に速めのペースで論文作成にあたるこ

とが肝要です。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：専攻科目の背景となる広い知識の獲得のため、「国際社会と女性の人権」「グローバル経済のしくみ」、「平和学」等の科目の履修を推奨しています。**第一外国語（英語）**：自分の専門性を深めるためにも英語能力を高めることは不可欠です。1、2年次でしっかり英語力をつけ、上級生でも積極的に履修するようにしましょう。**第二外国語**：特に言語を指示しませんが、中国や朝鮮研究を志す可能性がある場合は、中国語や韓国語の語学力が要求されます。1年次から中国語または韓国語の学習を始めることを勧めます。また、1年次必修科目だけではなく、選択科目である読解A、読解B、作文と文法、会話も積極的に履修しましょう。**情報処理科目**：課題や卒業研究に取り組むためには、情報処理科目の知識は必須です。必修科目だけでなくテーマ別の選択科目も履修してみましよう。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

国際社会学科および国際関係専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目(◎必修科目 ○選択必修科目)
1年次	国際社会学科で学ぶ基礎作りをし、国際社会研究のための基礎的視点を養う。	◎国際社会論
	総合的に人間研究を行ってきた文化人類学という学問の基礎を養う。	◎文化人類学入門Ⅰ・Ⅱ
	現代の国際関係を理解するために、主として20世紀からの国際関係の知識を得ることを目標とする。 (1年次でできるだけ履修する)	◎国際関係論Ⅰ・Ⅱ
	国際社会論の授業内容を前提にしながら、グローバル化する現代社会の諸問題、およびそれを考察する視点の基礎作りを行う。	◎国際社会基礎演習
	スタディ・スキル、スチューデント・スキルなどの初歩的な理解を目指す。	◎基礎演習(国際関係)
【1・2年次共通】 比較文化、国際関係史、諸地域の歴史・文化・社会・政治について専門性を深める。	○基礎講義の各科目	
2年次	自分の個人的な問題意識を他人にも理解できる言葉で表現し議論ができるよう訓練する。	◎2年次演習(国際関係)Ⅰ・Ⅱ
	【2・3・4年次共通】 各分野の研究領域について理解を深め、より高度な知識を獲得する。	○応用講義の各科目
3年次	卒業論文を作成する前段階として、各自の専門研究を深めることを目的とする。	◎3年次演習(国際関係)Ⅰ・Ⅱ
4年次	バランスのとれた専門性の高い内容の論文として完成させるために必要な力を養う。口頭発表、演習履修者全体での討論や意見交換、指導教員のアドバイスなどにより各自が新たに得た学問的発見を論文に反映できるようにする。卒業論文作成の過程を通し、自分で物事を考え、整理し、主張をしていくという社会人としての基本的要件も同時に習得していく。	◎4年次演習(国際関係)Ⅰ・Ⅱ ◎卒業論文

経済学専攻

《教育目標》

経済学専攻はグローバル化する現代経済のさまざまな経済・社会問題を理論的に分析し、あらゆる場面において問題を解決するために社会に働きかけていく意欲と能力を持つ人材を育成することを目的としています。少人数教育に基づいたきめ細やかな教育は、学生一人ひとりが明確な問題意識を持つことを可能にします。1年次から4年次までの演習では、報告と議論を通じて、問題発見能力とともに、自己の主張を相対的に捉え直し、説明する力を身につけます。講義では、基礎から応用へと段階を追って経済学を学習し、現代経済の新たな展開に対応できる柔軟な思考力と実践力を養います。

《カリキュラムの特色》

- ①「入門」の授業を通じて、経済学とは何か、どう学ぶかを習得します。

経済学は「社会科学の女王」と呼ばれるほど、論理的で体系的な学問です。物事を論理的に捉え、一時的な感情に左右されない冷静な判断力を涵養するため、「入門」では経済学の本来の目的と経済学的な「ものの見方」をしっかりと学び、今後の学習に向けて、自分自身で確かな方向性を見つけていきます。

- ②「基礎講義」の授業を通じて、複雑な経済・社会問題を分析するための土台を築きます。

「基礎講義」は、「入門」で養った経済学の考え方をさらに深化させることを目標としています。経済学の分析手法とともに、歴史的な観点から現代を相対的に見ることを学びます。そうして、流動的な世界経済の状況を適切に分析し、問題の原因を究明し、解決方法を探るための基礎的な能力を身につけます。

- ③「応用講義」の授業を通じて、より専門的で幅広い問題解決能力の獲得を目指します。

「応用講義」では、開発や環境、企業や市場、ジェンダーや格差の問題など、個別分野の知識を深めるとともに、世界のさまざまな地域の経済の知識を豊かにしていきます。また、経営学・会計学・マーケティング、企業法・労働法・経済法など、企業の活動や経済の制度・ルールを学ぶことによって、幅広いアプローチが可能になります。

- ④ 4年間の演習で、自分が取り組む問題を仲間と一緒に突き詰めることができます。

演習は教員と学生の距離がもっとも縮まる場です。ここではむしろ学生が主人公です。自分の報告をめぐって、教員と議論を戦わせることもあれば、学生同士で活発な意見交換を行うこともあります。そのなかで、仲間の問題意識・目的意識に刺激され、自分の研究を深めていく環境が生まれます。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。1年次では、学科入門科目として「国際社会論」により国際社会研究の基礎的視座を学びます。この授業を前提に「国際社会基礎演習」で、グローバル化する現代社会の諸問題およびそれを考察するための基礎理論を学びます。専攻科目では、「ミクロ経済学入門」「マクロ経済学入門」「初級ミクロ経済学」「初級マクロ経済学」を通し経済学専攻で学ぶ基礎作りを行います。また、「基礎演習（経済学）」において、分析対象となる経済の仕組みを理解することや、経済学を学んでいくために必要な学習の技法（研究発表の仕方、質疑・応答や討論の行ない方、文献や資料などの集め方、調べ方）を学んでいきます。

2年次では、「2年次演習（経済学）Ⅰ・Ⅱ」および《基礎講義》の科目を通じて、経済学的思考を深化させ、分析方法を身につけます。「2年次演習（経済学）Ⅰ・Ⅱ」では、英語で経済を理解することを目標に英文のテキストを使います。経済学専攻の基礎講義には、必修の「初級ミクロ経済学」「初級マクロ経済学」以外に次の8科目があり、この中から最低でも4科目（8単位）を履修することが必要です。「中級ミクロ経済学」、「中級マクロ経済学」は、それぞれ初級程度の知識を持つ学生が、「理論経済学」の基礎理論を習得し、社会問題のさらなる分析能力を養うことを目的とします。このほか、実際の多様な経済政策の分析に必要な基礎的な経済理論を習得する「公共経済学」、これまでに習得した経済学（特にミクロ経済学）の基礎理論と公共経済学の理論を現実の経済問題に適用する「経済政策」、経済理論の歴史的展開を学ぶことにより現代理論の理解を深化させる「経済学史」、現代経済の基盤である市場経済の成立と変容を理解する「経済史」、ミクロ・マクロ経済学の数学的理解に必要な数学の手法を身につける「経済数学」、社会科学分野の統計データの分析と解釈のために必要な基礎的統計学の知識を習得する「統計学」があります。また、2年次からは、《応用講義》により、各分野の科目を履修し、より専門的で幅広い問題解決能力を獲得して行きます。応用講義は、毎年開講されるとはかぎらないので、開講予定を確認しながら履修計画を立てることを勧めます（教育課程の備考欄参照）。

3年次では、少人数で行われる「3年次演習（経済学）Ⅰ・Ⅱ」を核として専門性を高めて行きます。経済の多様な分野と隣接する領域の知識を豊かにすることによって、柔軟な応用力を養います。

《応用講義》の各科目は、各自の関心、あるいは演習での研究テーマなどに応じて、幅広く履修してください。社会学専攻、国際関係専攻の科目を履修し、応用力を高めることもできます。

4年次では、これまでに身につけた知識と方法を総動員して卒業論文を作成します。原則として3年次演習と同じ教員が担当する「4年次演習（経済学）Ⅰ・Ⅱ」で綿密な指導を受けながら、自らが研究対象とする分野の知識を深め、個別の問題関心を学問的に磨き上げて行きます。卒業論文作成の指導もまた、原則として同じ教員が担当します。卒業論文は、大学での学びの集大成です。これまでに学んだ講義、演習に基づいて、自分自身で問題を発見・分析し、その解決策を探っていきます。テーマを選び、文献を読み、執筆するというプロセスを経て、学問的にも人間的にも大きく成長していきます。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：リベラル・アーツの理念に基づき現代社会や人間を広く、深く理解するために、幅広く各科目の履修を奨励しています。**第一外国語（英語）**：自分の専門性を深めるためにも英語能力を高めることは不可欠です。積極的に学習するように勧めます。**第二外国語**：特に言語を指示しませんが、国際経済の理解を深めるため読解A、読解B、作文と文法、会話も履修を勧めます。**情報処理科目**：データ処理の高度な知識・技術の習得が望ましいので、積極的な履修を勧めます。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

国際社会学科および経済学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目(◎必修科目 ○選択必修科目)
1年次	国際社会学科で学ぶ基礎作りをし、国際社会研究のための基礎的視点を養う。	◎国際社会論
	基本的なマイクロ経済学の知識を身に付け、現実の市場経済についての理解を深めることができるようにする。	◎マイクロ経済学入門
	マクロ経済学の基礎的な概念と理論を学ぶ。財政政策と金融政策の観点から日本経済が直面する諸問題と課題を理解することを目指す。	◎マクロ経済学入門
	「マイクロ経済学入門」の発展として、完全競争市場の特徴を考察する。つぎに市場への(政府)介入の意義と限界を検討する。最後に、不完全競争の分析を概観する。	◎初級マイクロ経済学
	ケインズの一般均衡理論から始まって、少し複雑な理論構築のおもしろさを理解することに挑戦する。	◎初級マクロ経済学
	国際社会論の授業内容を前提にしなが、グローバル化する現代社会の諸問題、およびそれを考察する視点の基礎作りを行う。	◎国際社会基礎演習
	大学での学び方と問題を発見する力を養う。	◎基礎演習(経済学)
【1・2年次共通】 経済学的思考を深化させ、分析方法を身につける。	○基礎講義の各科目	
2年次	英文テキストの読解を通じて、1年次に学んだ経済学の基本に対する理解を深めることを目標としている。論理的な思考方法と経済学的な考え方を確固としたものにする。	◎2年次演習(経済学) I・II
	【2・3・4年次共通】 各分野の研究領域について理解を深め、より高度な知識を獲得する。	○応用講義の各科目
3年次	1・2年次の基礎演習で獲得した理論をそれぞれの経済学分野に応用し、現実経済の動きを自分自身で分析できるようにする。	◎3年次演習(経済学) I・II
4年次	各分野の知識を深化させ、各自がテーマを絞ってより専門的な学習を行うとともに、相互の議論を通じて、主体的に研究を進展させる能力を養う。卒業論文の作成とも連動させながら、先行研究のリサーチ、必要な資料・文献やデータの収集と整理、論文の構成の立て方など、論理的・客観的な学術論文を執筆できるようにする。	◎4年次演習(経済学) I・II ◎卒業論文

社会学専攻

《教育目標》

社会学専攻は、グローバルな視野から社会問題を調査し解決する能力を養うことを目的としています。私たちの生活の中で身近で当たり前だと思っていることに疑問を投げかけ、その本質を探っていきます。エスニシティ、文化、ジェンダー、労働と生活など社会問題を多面的に捉える眼を養い、他専攻とも連携しながら、国内外の社会の現実积极主动に働きかけていく人材を育成します。

《カリキュラムの特色》

社会学専攻では、1年次から演習授業を取り入れて、学問的な「ものの見方」を学んでいきます。入門的な講義により、社会学を学ぶ土台作りをします。2年次では、1年次の学びを一層深めるとともに、社会調査法の勉強がはじまり、問題を自ら捉え解決する能力の養成を目指します。3年次、4年次では、各自の関心に従って演習・調査実習のクラスに分かれ、学習の総仕上げに向かいます。

① 最先端の研究成果を学ぶ科目

国際化、少子高齢化が進むいま、女性、子ども、高齢者、障害者、定住外国人など、多様な人々が尊厳を認め合いながら、年齢や性別、国籍等にとらわれず支え合う社会の創造が求められています。それらにかかわる研究成果を講義や演習を通して理解を深めていきます。

② 行動的で実践的な研究方法を学ぶ科目

実際に社会的現実接して社会問題を考えるために、量的・質的社会調査の手法を習得します。

③ 少人数での演習科目

各年次に演習があります。上級生の演習は、経営・労働・家族・地域・福祉・文化・社会心理などの領域毎に分かれており、専門的な学習を深めていきます。社会調査実習が演習クラス別に設置され、各自の関心に合った調査方法を学び、実習を行います。

④ 卒業研究

個別指導や学生相互の討論などを行い、卒業研究に向け綿密に準備していきます。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。1年次では、学科入門科目としての「国際社会論」により国際社会研究の基礎的視座とは何かを学びます。この授業を前提に「国際社会基礎演習」で、グローバル化する現代社会の諸問題、およびそれを考察するための基礎理論を学びます。専攻科目では、「社会学概論Ⅰ・Ⅱ」を通し社会学専攻で学ぶ基礎作りを行います。また、「基礎演習（社会学）」において、社会学を学んでいくために必要な学習の技法（研究発表の仕方、質疑・応答や討論の行い方、文献や資料などの集め方、調べ方）を学んでいきます。

2年次では、「社会学史Ⅰ・Ⅱ」、「社会調査法A」、「2年次演習（社会学）Ⅰ・Ⅱ」を中心に、社会学全般の体系的な知識を養います。「社会学史Ⅰ・Ⅱ」では、社会学の歴史を社会学の理論と具体的な社会状況の関連に着目して学び、社会学という学問の輪郭を把握します。社会調査法では、社会調査に必要となる知識を体系的に身につけていきます。質問紙によるデータ収集や事例研究、調査倫理など、社会的現実接して事実を解明するための量的・質的社会調査法に関する知

識と姿勢を習得します。2年次必修の「社会調査法A」のほか、《応用講義》の「社会調査法B」および「社会調査法C」を選択することができます。「2年次演習（社会学）I・II」では、社会的なものの方、考え方について、自主的な発表、討論などによる演習形式で学習します。現代社会の具体的な諸現象、社会問題を題材とし、社会学の各論的な広がりとともに、社会的な発想法、社会学の基礎概念および理論枠組、方法論など社会学の総論的内容を学びます。同時に、効果的な口頭発表（プレゼンテーション）のやり方、学術的な文章の書き方、討論の進め方を習得します。2年次からは、多面的に社会問題を扱う《応用講義》の各科目を各自の関心に応じて履修していきます。

応用講義は、毎年開講されるとはかぎらないので、開講予定を確認しながら履修計画を立てることを勧めます（教育課程の備考欄参照）。3年次でどの担当者の演習を履修するかということは、卒業論文のテーマにもかかわってきますので、2年次のうちに自分の関心の所在を明確にしておくことが必要です。

3年次では、少人数で行われる「3年次演習（社会学）I・II」に分かれ、これを核として専門性の高い知識を習得していきます。同時に、演習別に分かれて履修する「社会調査実習I・II」では、演習と連携して行われるきめ細かい指導を通じて、研究領域によって異なる調査方法を身につけます。これらの学習により、卒業研究の綿密な準備が可能となります。《応用講義》の各科目は、各自の関心、あるいは演習での研究テーマなどに応じて、幅広く履修してください。経済学専攻、国際関係専攻の科目を履修し、応用力を高めることもできます。

4年次では、大学での勉強の集大成として、これまで体系的に修得した理論と知識を用い、各自が関心をもつ具体的なテーマについて卒業論文を作成します。原則として3年次演習と同じ教員が担当する「4年次演習（社会学）I・II」で綿密な指導を受けながら、自らが研究対象とする分野の知識を深め、個別の問題関心を学問的に磨き上げていきます。卒業論文作成の指導もまた、原則として同じ教員が担当します。卒業論文は、大学での学びの集大成です。これまでに学んだ講義、演習、社会調査実習に基づいて、自分のテーマにそって論文を作成します。テーマを選び、文献を読み、場合によっては調査をしながら執筆するというプロセスを経て、学問的にも人間的にも大きく成長していきます。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：現代社会を広く、深く理解する基礎的な知識を習得するために、「人間の知的生産」、「人間社会の仕組みと問題」領域の各科目の履修を奨励しています。また、女性学的視点を養うためには、関連する科目の積極的な履修を勧めます。 第一外国語（英語）：自分の専門性を深めるためにも英語能力を高めることは不可欠です。積極的に履修するように勧めます。 第二外国語：特に言語を指示しませんが、国際社会の理解を深めるため読解A、読解B、作文と文法、会話も履修を勧めます。 情報処理科目：データ処理の高度な知識・技術の習得が望ましいので、積極的な履修を勧めます。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

国際社会学科および社会学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目 (◎必修科目 ○選択必修科目)
1年次	国際社会学科で学ぶ基礎作りをし、国際社会研究のための基礎的視点を養う。	◎国際社会論
	社会学の視点と方法について基礎的知識を得る。	◎社会学概論Ⅰ・Ⅱ
	国際社会論の授業内容を前提にしなが、グローバル化する現代社会の諸問題、およびそれを考察する視点の基礎作りを行う。	◎国際社会基礎演習
	自主的な学習を前提とした報告や討論による演習形式での講義を通じて、大学で社会学を学んでいくために必要な学習の技法を習得する。	◎基礎演習(社会学)
2年次	社会学という学問が発展してきた歴史について、背景となる社会的現実に関連づけながら学習する。	◎社会学史Ⅰ・Ⅱ
	統計による量的調査法、事例研究による質的調査法の両者について、基礎的な手法と具体的な進め方を学習する。	◎社会調査法A
	社会的なもの、学問的なもの、考え方について、自主的な発表、討論などで、効果的な口頭発表の行ない方、学術的な文章の書き方、討論の進め方について学ぶ。	◎2年次演習(社会学)Ⅰ・Ⅱ
	【2・3・4年次共通】 各分野の研究領域について理解を深め、より高度な知識を獲得する。	○応用講義の各科目
3年次	自らの専攻領域を決め、卒業論文研究に向けて、理念的側面、方法的側面、技術的側面について学びながら、卒業論文研究の基礎作りを行う。	◎3年次演習(社会学)Ⅰ・Ⅱ
	卒業論文研究の準備のために演習と連携して行い、社会調査の方法を学ぶ。	◎社会調査実習Ⅰ・Ⅱ
4年次	卒業論文作成に向けて、発表や討論を重ねることにより、個人の研究内容の進化を計り、論文執筆のための技法を習得する。自ら問題を発見・分析・解決する能力を伸ばすことによって、現実の問題に対する応用力を高める。	◎4年次演習(社会学)Ⅰ・Ⅱ ◎卒業論文

人間科学科

《学科の理念・目的》

人間科学科は、心理学、コミュニケーション、言語科学の分野を横断的に学ぶことを通して、分析能力、問題解決能力を養い、人間・社会・世界を科学的に探究し、現代に生きる人間のあり方を考究・提言できる人物の育成を目的とする。 (東京女子大学学則 第4条第4項)

人間にはこころがあり、他者のこころを感じ取りながら行動します。人間にはことばがあり、意思や文化を豊かに効率良く伝えます。現代の人間にはマスメディアや情報機器があり、社会を劇的に変えています。この「こころ」「ことば」「コミュニケーション」の3つの視点から、現代の人間のあり方を考え、人間が抱える課題を取り上げて学究をするのが人間科学科です。

本学科では、人間の認知的活動を自分自身の心象、周辺との関係、社会的環境を通して観察し、個人から他者、地域、社会へと展開する人間関係を総合的に探究します。心理学、コミュニケーション、言語科学の分野を横断的に学ぶことを通して、こころ、ことば、コミュニケーションの分析方法を身につけ、人間・社会・世界を見る分析力・思考力を養い、科学的探究心をもって、自らも含め現代に生きる人間のあり方を深く考え提言できる統合された知性を育むことを目的としています。

《カリキュラムの特色》

心理学、コミュニケーション、言語科学の3専攻により構成され、人間のこころ、行動、ことばとそのメカニズムを科学的方法によって探究する、人間科学の分野の教育を行います。

1、2年次では、人間科学科で学んでゆく色々な分野について広く学ぶ「入門」とともに、各専攻の基礎となる知識や研究調査方法の習得を目指す「基盤講義」および「基盤演習」を履修し、それ以降のより専門的な学習に対する基礎体力をつけます。特に「基盤演習」は、少人数のクラス編成で、学生自らが主体的に文献の調査や発表、議論を行い、問題解決能力を身につけることを目指します。2年次以降は、「特殊講義」により、学生が個々の関心に基づいて自らの知識を深めてゆくとともに、少人数での実習による体験学習を通して、人間科学の方法論や言語教育の現場に触れることができる「実験・実習」を履修します。最終的に「発展演習」では、学科科目の教育の成果を有機的に統合する形で、個々の学生が自らのテーマを決めて卒業研究プロジェクトに取り組みます。卒業論文は、自らの知的関心や問題意識に沿って研究テーマを設定し、資料・文献をもとに仮説を立て、これを調査・実験・実習等により検証して、明確な根拠とともに提示するという一連の営みを通じて、大学での勉強の集大成として作成します。卒業論文は、自発的な取り組みなしには完成不可能です。各自が問題意識をしっかりと持つことが大切ですので、4年間を通して常に文献を読み、情報を得て、積極的にものを考えるよう心がけることを勧めます。

心理学専攻

《教育目標》

心理学では、見る・聞く・考える・記憶する・話す・よろこぶ・悩むなど人のあらゆる心のはたらき、人のさまざまな行動、誕生から死までの生涯発達のプロセスなどを取り扱い、それらを実験、観察、調査、面接を通して実証的データに基づいて理解し、探求します。さらに、人対人、あるいは大勢の人々同士が、どのように影響を与え合うのか、支援や協力はどのようにすれば実際に役立つのかなどについても解明します。早くから特定の心理学分野の教育に偏ることなく、心理学の幅広い領域全体にわたる基礎的素養をベースとしつつ、その上に学生個々人の関心に根ざした高い専門性を構築することが本専攻の目的です。

《カリキュラムの特色》

心理学専攻では、心理学がどのような研究方法で人間の心や行動を解明しようとしているのか、どのような研究領域があり、各領域では具体的にどのような研究がなされているかを学びます。人の心のおもしろさ、不思議さを知り、その奥にある心の働きの法則を探りながら、やがて人間に対する深い洞察に至ることを目標としています。そのために、学生の研究分野を早くから固定することを避け、認知心理学、発達心理学、臨床心理学、社会心理学の4領域を柱として、広い領域についての知識を偏りなくもつことができるような構成とし、実験演習や少人数による演習を重視しています。

講義：多くの領域の心理学的知見を踏まえて、初めて人間を全体として理解することができます。そのため、認知、知覚、発達、教育、臨床、社会の各心理学、精神保健学、および学際的あるいは隣接の領域など、広い分野における重要なテーマや最新のトピックを取り上げた講義が行われます。幅広い分野の講義で、深く人間を理解し、自分の関心を追究します。

演習：演習は、主体的に調べ、発表し、他の人の発表を聞き、討論することにより、学び、研究する姿勢を身につけていく重要な学習方法です。1年次の入門的演習を経て、2年次からは自分の関心に沿ったテーマの演習に参加します。少人数グループで自発的に学習する態度を身につけます。

実験演習：心理学の学習では、実験・観察・調査・面接等を体験し、データの取り方、その処理の仕方をも身につけることが大切です。心理学専攻では、1年次から4年次まで実験演習の科目をおき、基礎的な実験演習からそれぞれの学生の個別のテーマまで、具体的な研究法の修得を目指します。講義、演習、実験演習の学習は、お互いにすべてが関連しあっています。一つだけを先に学習しても十分な効果は得られません。心理学専攻のカリキュラムでは、各学年で常にそれらを関連づけ、統合的に、初歩的なレベルから高度なレベルに進んでいくように工夫しています。

4年次では、集大成として卒業論文を作成します。1年次から積み重ねてきた実験演習や他の全ての学びのまとめとして、卒業論文に真剣に取り組むことは後の大きな力ともなるでしょう。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。1年次では、学科入門科目の「人間科学概論Ⅰ」と「人間科学概論Ⅱ」により、人間科学科を構成する3領域（心理・コミュニケーション・言語科学）を横断的に学び、人間の心のメカニズムや社会における人間の営みの特質についての理解を深めます。専攻科目では、「心理学概論Ⅰ・Ⅱ」により、心理学の全般的・基本的知識を習得します。「1年次演習（心理学）」では、入門的な内容のテーマで演習を行い、これから4年間にわたる学びの基礎となる知識や技能（例えば、文献を探したり閲覧したりといった図書館の利用、資料を調べてレジュメを作る技能、プレゼンテーションや意見交換を行うスキルなど）の全般的な習得を目指します。「基礎実験演習Ⅰ・Ⅱ」では、心理学の方法論を初歩的な実験などの体験を通して理解することを目指します。「心理学研究法1」では、心理統計の考え方に触れ、記述統計および推測統計につい

て学びます。

2年次では、実証的に人間を理解し探求するための技能と知識の習得を目標とします。同時に、心理学と他領域との学際的な領域にまで及ぶ基礎知識の獲得と、心理学の各研究領域における専門的な知識の習得も目標となります。「心理学基礎講義 A・B」では、1年次の「心理学概論 I・II」の理解を踏まえ、さらに広い心理学の分野に眼を向けて、心理学の基礎知識を身につけていきます。

「心理学研究法 2」では、研究デザインの計画法や統計的なデータ処理を学びます。単純に手計算でできる分析法もありますが、非常に複雑な計算を必要とする手法もあります。実際の計算は、コンピュータにデータを入力して比較的簡単な操作で実行することができますが、それだけにその分析をどのような目的で使うか、結果をどのように解釈することができるかなどをしっかりと理解していることが重要です。数学的理解は基礎からの積み重ねが大切なので、1年次必修の「心理学研究法 1」の単位を修得しないと「心理学研究法 2」には進めません。「一般実験演習 IA・IB」では、心理学の基本的な研究方法である実験、観察、面接、調査の技法を習得します。「2年次演習 (心理学) A・B」では、1年次の演習を踏まえ、心理学の基礎的な内容を題材とした演習を行い、そこで取り上げる心理学のテーマについて深く理解するとともに、より進んだ3年次の演習で必要となるスキルを身につけます。また、2年次から履修できる《特殊講義》は、認知、知覚、発達、教育、臨床、社会の各心理学、精神保健学、およびその他（心理学の隣接領域的なあるいは学際的および先端的なテーマ）の心理学の特論が、毎年十数科目開講されます。自分が最も強い関心を持って深く学びたいと思うテーマを探し、見つけていくことができるよう履修してください。

3年次では、心理学の全般にわたる基礎知識を土台として、演習とさまざまな分野の講義によって、学生個人が自分自身の関心を深く見つけ、自分の関心に基づいて主体的に専門的な学習を行うことを目標とします。専門的な知識と技能をさらに高めつつ、4年次の卒業論文研究に向けた準備を始めます。「3年次演習 (心理学)」では、1年次演習および2年次演習を踏まえ、自分自身の関心に従って希望の領域やトピックを取り扱うクラスに入ります。3年次前期の「一般実験演習 II (実験法)・(質的研究・面接法)・(調査法)」では、「一般実験演習 IA・IB」および、「心理学研究法 1・2」で習得した基本的な研究方法についての技能と理解を前提に、より発展的な研究技法を習得します。3年次後期の「特殊実験演習 1」は、一般実験演習の次の段階であり、学生の希望を踏まえてクラス分けを行います。それまでの学習を総合して卒業論文でどのような領域やテーマの研究をしたいかの希望の下に、それぞれのクラスでの卒業論文の土台作りとなるような実験演習を行います。さらに選択科目として、3、4年次対象の「心理学特殊演習」があり、より高度な内容を希望する学生や大学院への進学を考えている学生のために前期に2クラス開講されます。

4年次では、卒業論文研究を大きな柱として、一人一人の関心に基づいて実証的な研究を進め、4年間の学習の集大成としての卒業論文を完成させることを大きな目標とします。卒業論文研究を中心として、研究の発想、文献の渉猟と精読、研究計画の立案と実施、データの定量的・統計的な分析と検定、結果の解釈、論文の執筆といった、さまざまな作業を学生自身が推し進めます。同時に、データ収集に協力してもらう研究協力者との関係の中で、研究や人間に対する倫理的配慮についても自覚できるようになることを目指します。「特殊実験演習 2A・2B」では、先行研究の収集や実験・観察・面接・調査の実施についての具体的で詳細な計画と実行、そして得られたデータの分析など、実験演習の集大成として自分自身の研究の遂行に沿った学習が進みます。「特殊実験演習 2A・2B」を履修するためには、必ず「特殊実験演習 1」を修得していなければなりません。

卒業論文は、4年次で全員が作成します。ただし、2～3人がグループとなり、共同で一つの研究に取り組むことも認めています。心理学の実験・調査では、常に、協力者を求める必要があるため、一人一人が十分な人数の協力者を求めることはしばしば困難であり、また、実験室・装置などの設備の制約もあるためです。しかし、この共同研究は、一人ではできない大規模な調査、労力のかかる実験や観察などを協力して実施することを可能にし、またアイデアや意見を出し合っによりよい研究に仕上げていくという有意義な成果もあげています。

卒業論文のテーマの決定は、上記の「特殊実験演習1」の説明で述べたように、3年次後半に準備段階に入ります。4年次になると、テーマを確定し、個別の指導を受けながらたっぷり時間をかけて卒業論文に取り組みます。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：人間の心や行動を理解するためには、進化の視点から動物の行動と比較することが非常に有用なので、比較心理学や比較認知科学の理解のために「こころの進化」の履修を推奨しています。**第一外国語**：心理学の主要な研究論文の多くが英語で出版されているので、文献講読等の基礎能力として学習を勧めています。**第二外国語**：特に言語を指示しませんので、自分の関心に従って履修してください。**情報処理科目**：心理学専攻では、統計的なデータ解析や文献検索等でコンピュータを使用することが多いので、履修を勧めています。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

人間科学科および心理学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目（◎必修 ○選択必修）
1年次	人間科学科で学んでゆく色々な分野について広く知る。	◎人間科学概論Ⅰ ○人間科学概論ⅡA・ⅡB・ⅡC
	心理学の全体像を把握する。	◎心理学概論Ⅰ・Ⅱ
	心理学の実証研究に必要な統計、分析などの技能と知識の基礎を習得する。	◎心理学研究法1
	スタディ・スキルの基礎を身につける。	◎1年次演習(心理学)
	心理学の研究方法を初歩的な実験などを通して学ぶ。	◎基礎実験演習Ⅰ・Ⅱ
2年次	心理学のさらに広汎な領域にわたる基礎的知識を獲得する。	◎心理学基礎講義A・B
	心理学の実証研究に必要な統計、分析などの技能と知識を習得する。	◎心理学研究法2
	観察、面接、実験、調査などを通して、心理学の基本的な研究方法を理解し習得する。	◎一般実験演習ⅠA・ⅠB
	取り上げた心理学のテーマを深く理解するとともに、3年次演習で必要なスキルを身に付ける。	◎2年次演習(心理学)A・B
	【2・3・4年次共通】 心理学の各研究領域における専門的な知識を習得する。	○特殊講義の各科目
3年次	取り上げた心理学の発展的な内容について深く理解するとともに、卒業論文に向けて主体的に学習に取り組む力を養う。	◎3年次演習(心理学)
	より発展的な研究技法を習得する。	○一般実験演習Ⅱ(実験法)・(質的研究・面接法)・(調査法)
	卒業論文における研究に必要な専門的な知識や技能を習得する。	◎特殊実験演習1
4年次	一人一人の関心に基づいて実証的な研究を進め、4年間の学習の集大成としての卒業論文を完成させる。卒業論文における研究を中心として、研究の発想、文献の渉猟と精読、研究計画の立案と実施、データの定量的・統計的な分析と検定、質的データの分析結果の解釈、論文の執筆といった、さまざまな作業を学生自身が推し進める。	◎特殊実験演習2A・2B ◎卒業論文

コミュニケーション専攻

《教育目標》

マスメディアやインターネットなどの情報・コミュニケーション技術の発展とグローバル化により現代社会はますます多様化しています。コミュニケーション専攻では、現代社会の様々な特性や問題をコミュニケーションという切り口で分析しています。

- コミュニケーションを切り口に、今日の複雑な人間と社会を捉える多面的な力を培います。
- 捉えにくい現代の真実を、調査や研究でデータから正確に捉える態度と方法を身につけます。
- 最新のコンピュータ情報技術を日常的に駆使できる、最高水準の情報リテラシーを身につけます。

《カリキュラムの特色》

現代社会の様々な特性や問題を、コミュニケーションという切り口で学際的に幅広く体系的に研究できるよう構成されています。具体的には次のような研究領域があります。

- ① コミュニケーションに関する心理学的研究
- ② コミュニケーションに関する社会学的・ジェンダー論的研究
- ③ メディアに関する研究
- ④ より良い情報通信やインターネットの利用の研究
- ⑤ 多文化とコミュニケーションに関する研究

演習・実習をコアに据えた、少人数で一人ひとりを大事にした密度の濃い指導を行い、客観的・実証的な視点から社会の諸問題に取り組むことができるように、研究法入門、統計学、研究法実習、社会調査法実習などの科目群を置き、調査法・実験法などの研究手法を用いて、体系的・論理的な思考力を養います。また、情報通信に関する技術を修得するためのコンピュータ・スキルズ、情報システム、情報通信ネットワークなどの科目群では最新の装置や環境で実践的技術を学ぶことができます。卒業研究では毎年、学生たちが様々なテーマを見つけて興味深い研究をしています。

《履修法の助言》

■ 学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。1年次では、学科入門科目の「人間科学概論Ⅰ」と「人間科学概論Ⅱ」により、人間科学科を構成する3領域（心理・コミュニケーション・言語科学）を横断的に学び、人間の心のメカニズムや社会における人間の営みの特質についての理解を深めます。

専攻科目では、「コミュニケーション概論A・B」で幅広く基礎的な知識を養い、《基盤演習》「1年次演習（コミュニケーション）」でコミュニケーション学への入り口として、文献を探して読み込み、批判的に考え、発表し、議論することを通して、学習の仕方のみならず自分の意見をまとめプレゼンテーションを行う力も養います。演習という授業形式に初めて参加し、高校までの学習スタイルから批判的で主体的・探索的な学習スタイルへ変わる訓練を行います。演習では、教員だけでなく受講生も主体的に授業の内容を構成してゆきます。学生同士の活発な議論と教員のきめこまかい指導により、自分のテーマに積極的・意欲的に取り組んでいくことを期待します。「コミュニケーション特論」の各科目は、予備知識や学年に関係なく履修することができます。現代的なトピックを扱い、各自の関心により各研究領域の専門性のある知識を得ることで、自らの研究テーマを考える第一歩とします。

2年次では、「コミュニケーション研究法入門」、「統計の基礎」、「コンピュータ・スキルズ」（いずれも必修科目）で実証的な研究方法の基礎を学びます。学際的なコミュニケーション研究分野においては、質問紙調査、実験、内容分析、質的研究など多様な研究方法があります。実証的研究を重視する本専攻では、どのような領域の研究であれ、方法論的知識と能力を身につけることを目標としています。「コミュニケーション研究法入門」および「統計の基礎」の履修により、コミュニケーション学で用いる研究方法の概要をすべて学び、人間科学・社会科学の方法論を網羅的・体系的に理解します。「2年次演習（コミュニケーション）」では、英語文献を読むことが中心となります。テーマ別に各専門領域に分かれますが、卒業論文に直接関係するというより視野を広げる《基盤演習》として位置付けられます。同時に、2年次以上を対象とする《特殊講義》（コミュニケーション各論）による専門性の高い講義で、幅広い知識を得て、自分のテーマを考えていくことになります。2年次では、一つの専門領域にとどまることなく、コミュニケーションに関する幅広い知識を習得することが望まれます。

3年次では、より専門的な卒業論文作成にむけて研究方法を活用し、自らの研究テーマがみつけれられるような演習・授業が中心となっていきます。「3年次演習（コミュニケーション）Ⅰ・Ⅱ」では、自分のテーマを卒業研究プロジェクトに組み立てていくために、先人の問題意識や方法論を文献から学ぶことが中心になります。「コミュニケーション研究法実習」の各科目では、自己の研究テーマに沿った方法を4種類の研究方法から選択し、より実践的にデータを収集・分析・報告するスキルを修得して卒業研究の準備とします。

4年次では、3年間で学んだ諸知識を十分に反映させて「4年次演習（コミュニケーション）Ⅰ・Ⅱ」、「卒業論文」に取り組みます。3、4年次の演習は、自分の問題意識に意欲的に取り組んでいくことができる専門的な《発展演習》で、「卒業論文」につながるものです。4年次演習は、原則として3年次と同一担当者の演習を継続履修します。なお、演習によっては特定の授業科目の履修を指導する場合があるので注意してください。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：学科の教育内容と直接に関連の深い「こころの科学」、「こころと社会」、「こどものこころ」、「現代の家族とジェンダー」、「社会学と現代社会」、「統計のしくみ」*、「統計分析を学ぶ」等の科目の履修を推奨しています。第一外国語（英語）：専攻の5つの主要な領域の1つである国際・異文化の学習・研究の基礎を作るものです。専攻で扱う多くの研究や資料は英語でしか入手できないことも多く、「2年次演習（コミュニケーション）」では英語の文献資料を講読して発表やディスカッションを行っています。第二外国語：特に言語を指示しませんが、専攻の5つの主要な領域の1つである国際・異文化の学習・研究の基礎を作るものです。例えば、中国の新聞や韓国のメディアを扱う場合は、「中国語」や「韓国語」の学習が必要となります。情報処理科目：専攻の5つの主要な領域の1つである情報研究と密接な関係にあります。必修の「情報処理技法（リテラシ）Ⅰ」では、情報技術のベースライン作りが行われます。専攻の情報研究の内容と相補的に働き、より深く学習を進めることが可能となりますので、「コンピュータ・サイエンスⅠ・Ⅱ」「情報処理技法（Webでの情報表現）」等の選択科目の履修を推奨しています。なお、本専攻では「情報処理技法（リテラシ）Ⅰ」の単位修得を4年次への進級条件としています。（*総合教養科目の必修要件参照）

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

人間科学科およびコミュニケーション専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目（◎必修科目 ○選択必修科目）
1年次	人間科学科で学んでゆく色々な分野について広く知る。	◎人間科学概論 I ○人間科学概論 II A・II B・II C
	スタディ・スキルの基礎を身につける。	◎1年次演習(コミュニケーション)
	コミュニケーション学に関連する基本的な考え方を身につける。	◎コミュニケーション概論A ◎コミュニケーション概論B
	【1・2・3・4年次共通】 コミュニケーションに関する専門的な内容に対する興味を喚起する。	○特殊講義の「コミュニケーション特論」の各科目
2年次	研究法の基本を身につける。	◎コミュニケーション研究法入門 ◎統計の基礎 ◎コンピュータ・スキルズ
	コミュニケーション学の専門的な内容について理解を深める。	◎2年次演習(コミュニケーション)
	【2・3・4年次共通】 専門知識を得つつ、専門内の視野を広げる。	○特殊講義 (コミュニケーション各論の各科目)
3年次	研究法が活用できるレベルにする。	○コミュニケーション研究法実習の各科目
	自分の研究テーマをみつけていく。	◎3年次演習(コミュニケーション) I・II
	【2・3・4年次共通】 コミュニケーション学の専門的な内容について理解をすすめる。	○特殊講義 (コミュニケーション各論の各科目)
4年次	これまでの学習を有機的に結合し、研究プロジェクトという形で自らがテーマとする問題に取り組み、実証的データの裏付けをもって論理的に学んだ成果を表現することができるようにする。	◎4年次演習(コミュニケーション) I・II ◎卒業論文

言語科学専攻

《教育目標》

人間は、「ことば」を持つことにより、複雑な社会と高度な文化を築く手段を得ました。言語科学専攻では、言語研究の基礎を土台に、人間の言語能力、その習得や教育、言語と社会・文化との関わり、社会・世界の中の言語の多様性について探求していきます。「ことば」の諸相を分析し理解する試みの中で、言語運用能力とともに分析力、思考力を養っていきます。言語の分析と議論を通して、自己の言語観・人間観・社会観を培いながら、知性を育てていきます。

《カリキュラムの特色》

人間の言語は多様な側面を持ち、さらに世界の言語を比較対照すると多様性と共通点が見えてきます。言語科学専攻では、上記教育目標を実現するため、「ことば」をさまざまな側面から考察し、みなさんの興味・関心を引き出すための科目を用意しています。

① 言語を科学的に分析するための知見と方法を学ぶ基礎となる科目

私たちの身近にある言語を、世界の人々が使いこなすさまざまな言語の例として考察し、「ことば」による人と人との交流、「ことば」が織りなす文化、社会の中の言語の働きを理解していきます。

② 言語について理解を深め、言語の歴史をたどる科目や多様な側面で言語を分析する科目

現象を整理して、個々の現象の特異性や現象の背後にある普遍性・規則性を把握する力を養っていきます。

③ 日本語教育、英語教育の科目

日本人に対する英語教育、日本語以外の言語を母語とする人たちに対する日本語教育を、理論・実践の両面から学びます。自分のキャリアの中核として英語教師や日本語教師を目指す学生が多いことも本専攻の特徴です。

④ 英語の運用能力を養う科目

全学共通カリキュラムの英語科目を土台に「読む・書く・聞く・話す」というオールラウンドな運用能力の向上をめざします。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。

1年次では、学科入門科目の「人間科学概論Ⅰ」と「人間科学概論Ⅱ」により、人間科学科を構成する3領域（心理・コミュニケーション・言語科学）を横断的に学び、人間の心のメカニズムや社会における人間の営みの特質についての理解を深めます。専攻科目では、「言語研究入門」で言語研究の第一歩として基本的な概念と分析方法等を学び、「Writing Skills 1A・1B」で、標準的な英語の文体、および、主題の提示や論旨のまとめ方を練習し習得し、「一般音声学」では、言語音の調音メカニズムを学び発音・聴音の訓練をおこないます。《基盤講義》の「英文法Ⅰ・Ⅱ」では、英語の文構造についての基本概念を、「英語史」では現在の英語の姿につらなる歴史的な背景について学ぶことができます。「一般音声学」とともに、これらの科目群は、言語分析に必要な知識や技能を身につけることを目的としていますので、積極的な履修が望まれます。「1年次演習（言語科学）」では、入門的な内容のテーマで演習を行い、これから4年間にわたる学びの基礎となる知識や技能（例えば、文献を探したり閲覧したりといった図書館の利用、資料を調べてレジュメを作る技能、プレゼンテーションや意見交換を行うスキルなど）の一般的な習得を目指します。「ことば」の世界を探求するには、個々の知識の獲得にとどまらず、その知識を自分の中で体系づけることが大切です。今まで学んできたことと矛盾しないか、新しい予測が出てこないかなど、いつも疑

問を形にしなから自分の世界観・言語観を創っていきましょう。

2年次では、言語の変遷や多様性、言語に関わる文化現象など、言語研究の幅広い分野を学ぶとともに、研究に必要なスタディ・スキルを身につけます。2年次必修の科目には、「2年次演習（言語科学）Ⅰ・Ⅱ」と「Writing Skills 2A・2B」があります。「2年次演習（言語科学）Ⅰ・Ⅱ」は、言語研究の専門分野に体験的に出会うことと、文献の内容の把握・口頭発表・ハンドアウトの作成などのスタディ・スキルの訓練を行うという、ふたつの目的をもっています。「Writing Skills 2A・2B」では、「Writing Skills 1A・1B」で学んだ文章構成法を基盤として、英語論文を書く上でのスキルを学びます。言語科学専攻では、英語を話す・聞く・読むことだけでなく、自分が調べたこと、考えたことを書いてまとめる能力も重視され、その能力を伸ばすために、「Writing Skills 1A・1B・2A・2B」が設置されています。

また、2年次からは、《特殊講義》の選択範囲が広がります。広い視野で言語と人間について理解を深めるのが本専攻の趣旨ですから、一つの分野に偏ることなく、幅広い領域に挑戦することが望まれます。〈理論言語学〉の科目群（「文体論」～「言語類型論」）では、言語をさまざまな側面から分析し言語についての理解を深めます。〈応用言語学〉の科目群（「言語とアイデンティティ」～「言語とところ」一部は1年次から履修可）では、文学、社会、認知能力など周辺領域との接点に迫ります。〈異文化理解・翻訳〉の科目群（「Cross-Cultural Understanding」～「文学とことば」）では、言語のかかわる文化現象を広く取り上げます。〈言語教育〉の科目群（「第二言語習得基礎論Ⅰ」～「日本語教育研究Ⅱ」）では、母語以外の言語の教育、具体的には、日本人に対する英語教育、日本語以外の言語を母語とする人たちに対する日本語教育を、理論・実践の両面から学びます。英語の教職課程、日本語教員養成課程とも連動し、その基礎をなす科目群ですので、英語教育、日本語教育を目指す人は2年次に履修を開始します。このほか、2年次から履修できる科目として、《発展演習》に英語の音声の特徴を学び、実践的に発音・聞き取り能力の向上を目指す「英語音声学演習」、《実験・実習》に「フィールド言語学演習Ⅰ・Ⅱ」、「コーパス言語学演習」があり、未知の言語と出会い調査する経験や、大規模な言語データの活用を通じて自ら積極的に考え分析する力を養うことができます。2年次では、豊富な選択科目を幅広く履修し知識を習得しながら、自分の興味に合った研究分野を考えておくことが必要です。2年次後期には、「3年次演習（言語科学）Ⅰ・Ⅱ」のクラス分けを行いますので、2年次前期末までに教員の専門分野や指導分野を知り、それぞれのゼミでどのような卒業論文が書かれているかも調べておくといよいでしょう。

3年次では、2年次までに得た基礎的な知見や技術を踏まえ、「3年次演習（言語科学）Ⅰ・Ⅱ」を中核として各分野の研究を深めます。「3年次演習（言語科学）Ⅰ・Ⅱ」では、当該分野の調査・分析に必要な学習を進め、学年末までに各自の卒業論文のテーマを見つけることを目指します。なお、「4年次演習（言語科学）Ⅰ・Ⅱ」は、3年次の演習のクラスがそのまま引き継がれ、新たなクラス分けは行われませんので、3年次の演習の選択は慎重に行う必要があります。《特殊講義》の各科目は、引き続き、各自の関心あるいは演習での研究テーマなどに応じて履修してください。3年次から履修できる《発展演習》には、Writingの力を伸ばしたい学生や卒業論文を英語で執筆する学生のための「Advanced WritingⅠ・Ⅱ」や、高度な英語運用能力を目指す「Advanced Reading & Discussion A・B」「Advanced Speaking A・B」があります。これらの科目および「Cross-Cultural Understanding」は、英語で授業が行われます。言語科学専攻における学習すべてにわたって必要な言語運用能力、とりわけ英語の能力を高めるために、積極的な履修を勧めます。

4年次では、「4年次演習（言語科学）Ⅰ・Ⅱ」を中心に、これまでに学んだ知識や方法論を活かして、各自の研究テーマを追求していきます。指導教員の綿密な指導のもと、論文発表、他の学生とのディスカッション、フィードバックを通じ、卒業論文作成に必要な専門知識を深化させるとともに、資料の活用、調査・分析等の能力、プレゼンテーション等の表現力をさらに高めていきます。

「卒業論文」は、4年間の勉学の集大成です。3年次演習の後半で方向づけをし、学年末までに

研究テーマを絞りこみます。卒業論文のテーマ設定などに関しては過去に提出された論文が参考になります。言語文化研究会刊行の『言語文化研究』には、毎年優秀な論文と卒業論文題目一覧を掲載しているので参考にするとよいでしょう。また、日本語教育の集大成となる「日本語教育実習」では、日本語教育の実践を経験することができます。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：専攻科目の背景となる広い知識の獲得のため、「ことばの世界」、「思考と論理」、「統計のしくみ」、「統計分析を学ぶ」、「自然科学のあゆみ」、「現代の科学と技術」「脳の科学」等の科目の履修を推奨しています。 **第一外国語（英語）**：第一外国語は、論理的に考えることと結びついた英語の運用能力の強化を目指します。大学での勉学を深めその成果を多様な形で活かすことに役立ちます。 **第二外国語**：特に言語を指示しませんが、いろいろな言語を学ぶ体験をすることは、言語の仕組みや文化の多様性を理解する上でも重要です。1年次必修科目だけではなく、それ以降の選択科目である中級、上級も履修するよう勧めます。 **情報処理科目**：上級学年の演習で扱うデータの分析の基礎となります。選択科目も履修して応用力を蓄えましょう。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。英語教員を目指す学生は、教育職員の資格取得に必要な所定の単位（「VII. 教育職員の資格取得」の項を参照）を修得した上、さらに言語科学専攻で定めた条件*を満たすことが必要です。

* 3年次後期定期試験の最終日までに次のいずれかの点数を有していること。

TOEFL テスト：PBT450 点以上、CBT133 点以上、iBT45 点以上、ITP450 点以上

TOEIC Listening&Reading：450 点以上、TOEIC Speaking：100 点以上

人間科学科および言語科学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目 (◎必修科目 ○選択必修科目 △選択科目)
1年次	人間科学科で学んでゆく色々な分野について広く知る。	◎人間科学概論Ⅰ ○人間科学概論ⅡA・ⅡB・ⅡC
	言語研究の基礎を身につける。	◎言語研究入門A・B
	言語研究に関連する基礎知識と技能を身につける。 言語と文化を中心に、人間が言語を持つことの意味を考える。	○一般音声学 ○英文法Ⅰ・Ⅱ ○英語史 ○文字表記論 ○言語とアイデンティティ ◎1年次演習(言語科学)
	標準的な英語の文体、主題の提示や論旨の進め方を習得する。	◎Writing Skills 1A・1B
2年次	専門分野の研究を体験し、スタディ・スキルを身につける。	◎2年次演習(言語科学)Ⅰ・Ⅱ
	英語による表現力、構成力を伸ばし、英語で論文を書くための能力を身につける。	◎Writing Skills 2A・2B
3年次	言語研究の各分野の理解を深め、自分の研究に結びつける。	◎3年次演習(言語科学)Ⅰ・Ⅱ
4年次	これまでの学習成果を活かし、調査・分析等の能力や表現力を養成して自分の研究成果を産み出す。	◎4年次演習(言語科学)Ⅰ・Ⅱ ◎卒業論文
2年次 ～ 4年次	言語の変遷や多様性、言語の音、意味、音と意味をつなぐ語形成や文生成などのメカニズム、言外の意味や文字表記、言語習得、言語の関わる文化現象、周辺領域との関わりなど、言語の様々な側面の研究を深める。 英語の運用能力を高める。	○音韻論 ○形態論 ○統語論 ○文字表記論 他 ○言語とところ ○言語文化論 ○翻訳研究 ○フィールド言語学演習Ⅰ・Ⅱ ○コーパス言語学演習 ○第二言語習得基礎論Ⅰ・Ⅱ ○日本語教育研究概論Ⅰ・Ⅱ ○Cross-Cultural Understanding △英語音声学演習 △Advanced WritingⅠ・Ⅱ

数理科学科

《学科の理念・目的》

数理科学科は、理系学問の基礎となる数学の修得を基に、数学、情報学、自然科学の分野を横断的に学ぶことを通して、数理科学的知識と柔軟な論理的思考力及び技術をもって社会と科学技術の発展に寄与できる人物の育成を目的とする。 (東京女子大学学則 第4条第5項)

数理科学科では、数学、情報学、自然科学(物理学、化学、生物学)の3つの分野を横断的に学び、高度な科学技術と情報にあふれた現代社会に対応する数理科学的知識を身につけ、複雑化した現代を生きる社会人に必要な思考力を養います。

数学は、独立した学問分野であると同時に、あらゆる自然科学や工学の基礎言語としての役割を持ち、数学を学ぶことにより、論理的に物事を考える習慣を養うことができます。また、社会の急速な情報化に伴い、情報社会を支える技術や金融経済を統御する理論など、現代数学における成果が直接応用される場が実社会においても増加しています。このような認識の上にたち、本学科では、すべての理系学問の基礎となる数学の修得をもとにして数理科学を学び、科学的論理的な思考力を身につけることを目指します。数理科学分野の研究者、教育者の育成とともに、現代社会のさまざまなニーズに応えうる人材の育成を目的としています。

《カリキュラムの特色》

数学専攻と情報理学専攻の2専攻により構成され、数学を基礎とし、数学、情報学、自然科学の3分野を連携させた教育を行います。

1年次では、理系の学問の基礎である基本的な数学の習得を目的に、両専攻ともに数学基礎科目を必修としています。この他に、専攻の必修または選択必修を課し、各分野の基礎的理解を図ります。2年次以降は、この基礎の上に、数学専攻では、純粋数学(解析学、代数学、幾何学)、応用数学(確率統計)を、情報理学専攻では、情報学、自然科学(物理学、化学、生物学)、更にこれらの分野を有機的に結びつけた情報理学(数理モデルの構築やシミュレーション)を学びます。また、現代社会のさまざまなニーズに応じるため、数学専攻においても情報や自然科学の知識を得ることができ、情報理学専攻においても関心を持った数学を深く学べるよう配慮し、学生が関心に応じて3分野を広く学べるカリキュラムとしています。2、3年次には選択の自由度が大きいため、学生の興味や卒業後の進路希望に応じて、アドバイザーがきめ細かな履修指導を行います。理系の学問の学習は基礎から順に積み重ねられるべきものですから、2年次指定の科目は基礎的なものを確実に習得して下さい。3年次指定の科目は出来るだけ広い分野にわたって履修することを心がけ、4年次の「講究」に備えてください。4年次では、それまでの学習の集大成として、専門分野に対する理解を深めると共に、科学的論理的な思考力、問題解決能力およびプレゼンテーション能力を養うことを目的に、両専攻ともに「講究」を必修としています。「講究」は、各クラス数名程度のゼミ形式で行う週2コマの授業で、学生は、自らの興味ある分野についてテーマを選び、担当教員の指導を受けながら、テキストの輪読、問題演習、調査・実習などを行います。「講究」では、主体的に学習や研究を進めてその結果を発表し、討論によって理解を深化させます。4年次の最後に「講究」の研究成果をまとめます。

数学専攻

《教育目標》

本専攻の目的は、数学の理論を体系的に学び、自然と社会の物事全般に通ずる数学的構造を理解し、それらを通して、論理的な考え方に基づいて判断し決断できる力を養うことです。数学は、それ自身においてたいへん美しい構造を持っていますが、さらにその一般性のために自然界の様々な現象に対して応用され、また社会の様々な問題にも広く応用されています。本専攻では、数学の美しい理論を理解することを通して、様々な分野で広く役に立つ思考の力を培います。

《カリキュラムの特色》

数学専攻のカリキュラムは、数学を中心に数理学の理論から応用まで広く学べる、柔軟で充実した構成になっています。1年次の必修科目では、大学で学ぶ数理学全体の基礎となる「微分積分学」と「線形代数学」の理論と技法を習得します。この基礎教育を土台に2年次以降は、数学の各専門分野について現代的な数学を基礎から体系的に学んでいくことができます。解析学、代数学、幾何学、応用数理学の各分野について、専門性が高まる順序で科目が構成され、学生がこれらの分野からひとつないし複数を選んで理解を深めつつ学習できるように配慮されています。科目の選択にあたっては、アドバイザーがきめ細かく履修指導を行います。また、2年次以降は、数学だけではなく、情報学や自然科学の科目も幅広く履修することができ、自然や社会の様々な物事と数学との交流について理解を深めることができます。4年次では、3年次までの学習の集大成として、必修科目の「数学講究」を履修します。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。

1年次では、理系の学問に必要な基礎学力を身につけることを目的に、学科必修の《数学基礎》の科目として「微分積分学Ⅰ・Ⅱ」、「線形代数学Ⅰ・Ⅱ」とこれに対応する演習科目「微分積分学演習Ⅰ・Ⅱ」、「線形代数学演習Ⅰ・Ⅱ」（計12単位）を履修します。演習科目では、学生各自が演習課題を解き、教員が添削指導をするなどのフィードバックを行うことにより、きめ細かく指導します。《基盤演習》の「1年次演習（数学）」では、大学で求められる主体的学習の基礎となる知識や技能を習得します。この他、情報学の基礎知識の習得を目的とする「情報学概論」を履修することができます。数学の学習は基礎から順に積み重ねられるものです。1年次の学習は大学で学ぶすべての土台と考えてください。

2年次以降は、この土台の上に、純粋数学（解析学、代数学、幾何学）、応用数理学（確率統計）の各分野の基礎となる理論を体系的に学びます。2年次指定の授業科目には、《解析学》の「解析学概論Ⅰ・Ⅱ」、「解析学の応用」、「連続と極限」、《代数学》の「線形代数学Ⅲ」、「代数学A」、《幾何学》の「位相数学Ⅰ・Ⅱ」、「グラフ理論」、《応用数理学》の「確率統計Ⅰ・Ⅱ」などがあります。

3年次では、各分野の内容について理解を深めるとともに、4年次でどの分野に進むか自主的に選択できるように各自の問題意識を高めていきます。学生は数学全般にわたる基礎教育を経て、専

門分野を決めることとなります。多数の分野にわたる授業科目が開講されているので、数学だけでなく、情報や自然科学などその周辺領域まで広く素養を身につけるよう、3年次指定の科目は出来るだけ広い分野にわたって履修することを心がけ、4年次必修の「数学講究」に備えてください。

4年次では、学生が各自一つの分野を決めて、卒業研究として「数学講究」を行います。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：「人間と自然科学」の領域の科目には数理科学の基礎教育としての意味合いがあります。それ以外の領域の科目は、社会人としての現代の教養を身につけると同時に、幅広い思想に触れて数理科学的思考の利点と限界を認識する、という重要性があります。 第一外国語（英語）：数学や自然科学の分野の専門的な研究論文はほとんどすべて英語で出版されています。4年次の数学講究で英語の専門書を読む場合もあります。数学の分野でも情報や自然科学の分野でも、基礎的な英語の読解力は不可欠です。 第二外国語：特に言語を指示しませんので、自分の関心に従って履修してください。 情報処理科目：情報学や情報理学の基礎教育の意味合いがありますので、選択科目の履修を勧めています。「情報」の教免を取得希望の人は、1年次後期に「情報処理技法（Cプログラミング）Ⅰ」と「情報処理技法（UNIXリテラシ）」、2年次前期に「情報処理技法（Cプログラミング）Ⅱ」を受講することを勧めます。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

数理科学科および数学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目（◎必修／◇情報理学専攻の科目）	
		解析学・代数学・幾何学・応用数理学	情報学・情報理学・自然科学 （興味に応じて学習する）
1 年次	理系の学問に必要な基礎学力を身につける。	◎微分積分学Ⅰ・Ⅱ ◎微分積分学演習Ⅰ・Ⅱ ◎線形代数学Ⅰ・Ⅱ ◎線形代数学演習Ⅰ・Ⅱ ◎1年次演習(数学)	情報学概論 ◇物理学概論 ◇化学概論、◇生物学概論
2 年次	解析学・代数学・幾何学・応用数理学の各分野の基礎となる理論を体系的に学ぶ。	解析学概論Ⅰ・Ⅱ、解析学の応用、連続と極限 線形代数学Ⅲ、代数学A 情報代数学 位相数学Ⅰ・Ⅱ、グラフ理論 確率統計Ⅰ・Ⅱ	プログラミング、◇ネットワークⅠ、情報と職業 ◇マルチメディア概論、◇アルゴリズムとデータ構造、◇数値計算、◇力学Ⅰ・Ⅱ、◇電磁気学
3 年次	各分野の内容について理解を深めるとともに、4年次でどの分野に進むか自主的に選択できるように各自の問題意識を高めていく。	複素関数論Ⅰ・Ⅱ、数理モデルと微分方程式、関数解析入門 代数学CⅠ・CⅡ 幾何学A、結び目理論Ⅰ・Ⅱ、幾何学BⅠ・BⅡ 数理モデルと確率論Ⅰ・Ⅱ	◇コンピュータアーキテクチャ、◇コンピュータグラフィックス、◇相対性理論 数理モデルとシミュレーションAⅠ・AⅡ
4 年次	これまでの学習の集大成として、専門分野に対する理解を深めると共に、科学的論理的な思考力、問題解決能力およびプレゼンテーション能力を養う。	◎数学講究 数理解析学Ⅰ・Ⅱ、情報解析学Ⅰ・Ⅱ 代数学特論AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ 位相幾何学AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ 確率統計特論AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ	◇ソフトウェア工学、◇データベースA・B ◇数理モデルとシミュレーションBⅠ・BⅡ

*この表は一つの例に過ぎません。表の科目をこの通りに履修する必要はありません。

情報理学専攻

《教育目標》

数学の基礎の上に、情報科学や自然科学の知識と理解（サイエンスリテラシー）を深め、物事を論理的に考え総合的に判断することのできる力を養うことを目的としています。

《カリキュラムの特色》

情報理学専攻では、数学の基礎の上に情報学と自然科学を融合させた教育を行います。情報学と自然科学の両方を学ぶことで、数学の基礎力に情報学と自然科学の応用力を加えた総合力を養います。

コンピュータには数学が深く関係しています。情報理学専攻では、理論からしっかり学ぶことによって専門的知識を得、問題を分析し、これを解決する能力を高めます。その上で、コンピュータ・シミュレーションで自然現象を解析するプログラムの作成、データベース構築などの実習を行い、コンピュータを実際に使いこなすことのできる力を養います。また、物理学、化学、生物学のさまざまな領域にわたる科目を置いているので、幅広い選択肢の中から自分が興味を持った分野を学ぶことができます。

1年次では、「微分積分学」と「線形代数学」と「1年次演習（情報理学）」、情報学、自然科学の基礎知識を習得します。この基礎教育をベースとして、2年次では、「プログラミング」「ネットワーク」などの情報学をはじめ、自然科学、数学の各分野の基礎となる科目を履修します。3年次では、専門性を深めるための科目を履修します。情報学、自然科学の両分野またはどちらか一方を重点的に学ぶことも可能です。4年次では、これまでの学習の集大成として、必修科目の「情報理学講究」を履修します。

《履修法の助言》

■学科および専攻の科目について

「学科・専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）」の表を参照し、各学年の学習がどのように位置付けられているかを確認してください。1年次では、理系の学問に必要な基礎学力を身につけることを目的に、学科必修の「数学基礎」の科目として「微分積分学Ⅰ・Ⅱ」、「線形代数学Ⅰ・Ⅱ」とこれに対応する演習科目「微分積分学演習Ⅰ・Ⅱ」、「線形代数学演習Ⅰ・Ⅱ」（計12単位）を履修します。演習科目では、学生各自が演習課題を解き、教員が添削指導をするなどのフィードバックを行うことにより、きめ細かく指導します。

さらに、選択必修として「情報学概論」、自然科学の概論3科目の中から4単位以上履修し、基礎を身に付けます。また、《基盤演習》の「1年次演習（情報理学）」では、大学で求められる主体的学習の基礎となる知識や技能を習得します。

2年次では、この1年次の学習を土台として、情報学・自然科学・情報理学の各分野の内容について体系的に基礎を固めて行きます。同時に、2年次指定の「解析学概論Ⅰ・Ⅱ」、「代数学A」、「位相数学Ⅰ・Ⅱ」および「確率統計Ⅰ・Ⅱ」などを興味に応じて履修し、数学の基礎力を身につけます。また、2年次以上では、多数の分野にわたる授業科目が開講されているので、情報学や自然科学、あるいはそれらを融合する形での授業科目（シミュレーション等）を選ぶことができます。3年次では、関心を持った分野を中心に学習して理解を深めるとともに、4年次の「情報理学講究」に向けて問題意識を高めてきます。学生は、各分野における基礎教育を経て、専門分野を決めることとなります。4年次には、学生が各自一つの方針を決めて、卒業研究として「情報理学講究」を行います。

■全学共通カリキュラムとの関連について

総合教養科目：「人間と自然科学」の領域の科目には情報理学専攻の基礎教育としての意味合いがあり、それ以外の領域の科目には、他分野の思考方法に触れることにより、数理科学的思考法の利点と限界を認識出来るという重要性があります。 第一外国語（英語）：専門科目の理解を深めるために英語の習得は不可欠です。また、4年次の「情報理学講究」において洋書をテキストに採用することもあります。 第二外国語：特に言語を指示しませんので、自分の関心に従って履修してください。 情報処理科目：情報学や情報理学の基礎教育として、また専門性を高めるためにも履修を推奨します。とくに「情報」の教免を取得希望の人は、1年次後期に「情報処理技法（Cプログラミング）Ⅰ」「情報処理技法（UNIXリテラシ）」、2年次前期に「情報処理技法（Cプログラミング）Ⅱ」を受講することを勧めます。

《その他》

履修の方法の詳細や資格取得等については、年度初めのガイダンス時の説明と配付資料を参照してください。

数理科学科および情報理学専攻の科目概要（各学年の目標と主な科目）

各学年の目標		主な科目（◎必修 ○選択必修／◇数学専攻の科目）		
		数学	情報学・情報理学	自然科学
1年次	理系の学問に必要な基礎学力、情報学および自然科学の基礎知識を身につける。	◎微分積分学Ⅰ・Ⅱ ◎微分積分学演習Ⅰ・Ⅱ ◎線形代数学Ⅰ・Ⅱ ◎線形代数学演習Ⅰ・Ⅱ	○情報学概論 ◎1年次演習（情報理学）	○物理学概論 ○化学概論 ○生物学概論
2年次	情報学・自然科学・情報理学の各分野の内容について体系的に基礎を固める。興味に応じて数学の基礎的な科目を履修する。	◇解析学概論Ⅰ・Ⅱ ◇代数学A ◇位相数学Ⅰ・Ⅱ ◇確率統計Ⅰ・Ⅱ 情報代数学 ○解析学の応用	プログラミング、 ○ネットワークⅠ、マルチメディア概論、アルゴリズムとデータ構造、 ○数値計算、情報と職業	○力学Ⅰ、力学Ⅱ ○電磁気学 ○物理化学A ○基礎生態学
3年次	情報学・自然科学・情報理学の中から興味を持った分野を中心に学習して理解を深めるとともに、4年次の「情報理学講究」に向けて問題意識を高めていく。	情報解析学Ⅰ・Ⅱ 代数学CⅠ・CⅡ 幾何学A	コンピュータアーキテクチャ、コンピュータグラフィックス、ソフトウェア工学、データベースA、ネットワークⅡ ○数理モデルとシミュレーションAⅠ・BⅠ 数理モデルとシミュレーションAⅡ・BⅡ	○相対性理論、 ○量子力学、○物理化学B、○化学反応学、物質科学、環境科学、現代化学A、生態学A・B、生物分類学、進化生物学、 ○分子生物学
4年次	情報学または自然科学を輪講あるいは調査・実習を行い、議論をしながら理解を深めると共に、個性を磨き、独創性を創出する感覚を養う。		データベースB オペレーティングシステム オートマトン、計算幾何学 ◎情報理学講究	数理物理学、現代物理学、現代化学B、○数理生物学

*この表は一つの例に過ぎません。表の科目をこの通りに履修する必要はありません。